

名城大学FD活動報告書

Meijo Faculty Development activity report

平成24年度

名城大学

FD委員会

目 次

1. はじめに	
●平成24年度のFD活動を振り返って	1
	FD委員会委員長 森川 章
2. 平成24年度FD活動一覧	3
3. 平成24年度FD委員会	
●委員構成	7
●活動記録	8
4. 平成24年度各FDチーム活動報告	
●自主開発チーム活動報告	9
	自主開発チーム座長 小池 聡 (都市情報学部教授)
●ワークショップチーム活動報告	11
	ワークショップチーム座長 肥田 進 (法学部教授)
●学生満足度チーム活動報告	13
	学生満足度チーム座長 稲垣 公治 (農学部教授)
●教育年報チーム活動報告	15
	教育年報チーム座長 杉村 忠良 (理工学部教授)
●大学院チーム活動報告	17
	大学院チーム座長 成塚 重弥 (理工学部教授)
5. トピックス	
●第14回FDフォーラム実施報告	
●第14回FDフォーラム実施報告	19
●所属別参加状況	23
●参加者アンケート集計結果	25
●当日配布資料	33
●第5回T&L CAFE実施報告	
●T&L CAFE～授業を語り合う～実施報告	55
●参加者アンケート集計結果	57
●FD委員会在り方検討委員会における検討結果報告	61
●教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会における検討結果報告	63
6. 資料	
●FD委員会要項	65
●平成24年度所属別FD活動参加状況	67
7. おわりに	
●編集後記	69

1. はじめに

平成24年度のFD活動を振り返って

FD委員会委員長

森 川 章

大学設置基準においてFDが義務化されたのは平成20年ですが、名城大学のFD活動はそれ以前の平成12年度から始まっており、平成24年度で13年目を迎えます。この間、名城大学のFD活動の内容も変遷を遂げてきました。これまでのFD講演会・FDフォーラムのテーマからいくつかをピックアップすれば以下の通りです。

- 平成12年度「大学力を創るFD－学生による授業評価から－」
- 平成17年度「大学力を創るFD～学部FDからの出発～」
- 平成22年度「学生の学習意欲を高める授業とは～学生の主体的学びについて考える～」
- 平成23年度「FDの義務化から3年～原点に立ち返って考える～」

これまでの活動により本学教員のFD活動に対する認知度は高いものとなっています。例年実施している「授業改善アンケート」は90%代の実施率であり、多くの教員に協力いただいています。反面、他方の事実として、FDフォーラムの参加率が年々減少傾向にあることや、FD活動に新鮮味が感じられなくなりつつあることも指摘されていました。

平成23年度に就任した中根学長は、就任時に発表した「教学執行部方針と課題」の中で「FDへの取り組みの見直し」を喫緊の課題とし、「学部・研究科主体のFD」の方針を示しました。FD委員会は、この学長提案を受けて、平成23年度には従来のFD活動の有用性を吟味することから始めました。検討の結果、従来の活動は有用・有意義であることを確認しました。つまりFDフォーラムや授業改善アンケート、T&L CAFE、教育年報、等々の活動は有意義なものであるし、今後も続けられるべきであるということを確認しました。平成24年度には、この確認に基づいて、従来の活動を発展的に継承し新たな事態に対応するためのFD活動の在り方を模索することになりました。具体的には、「FD委員会在り方検討委員会」を発足させ、今日必要とされるFD活動はどのようなものであるべきか、またそれはどのように展開されるべきか等々を検討してきました。そしてその検討結果は、FD活動の新たな枠組みとして大学協議会に提案され、承認されています（平成25年2月8日）。

このような経緯から名城大学のFD活動は、次年度からは新たな枠組みの下で発展・継承されていくことになりました。したがってこの活動報告書に記載され紹介されている今年度のFD活動は、従来の枠組みで取り組まれた最後のものということになります。その意味では、今回の報告書は長い発展過程の一里塚ともいえる記念すべき報告書です。是非ご一読され、今後の発展への建設的な提言をお寄せいただくようお願いいたします。

2. 平成24年度 FD 活動一覽

平成24年度 FD活動スケジュール一覧

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
FD委員会	★ 第1回FD委員会	★ 第2回FD委員会	★ 第3回FD委員会	★ 第4回FD委員会	★ 第5回FD委員会	★ 第6回FD委員会	★ 第7回FD委員会	★ 第8回FD委員会	★ 第9回FD委員会	★ 第10回FD委員会	★ 第11回FD委員会	★ 第12回FD委員会
FD委員会 在り方検討委員会		★ 第1回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第2回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第3回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第4回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第5回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第6回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第7回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第8回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第9回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第10回FD委員会 在り方検討委員会	★ 第11回FD委員会 在り方検討委員会
自主開発 チーム発				★ 第4回自主開発 チーム会議	★ 第5回自主開発 チーム会議	★ 第6回自主開発 チーム会議	★ 第7回自主開発 チーム会議	★ 第8回自主開発 チーム会議	★ 第9回自主開発 チーム会議	★ 第10回自主開発 チーム会議	★ 第11回自主開発 チーム会議	★ 第12回自主開発 チーム会議
ワークショップ チーム			★ 第4回ワークショップ チーム会議	★ 第5回ワークショップ チーム会議	★ 第6回ワークショップ チーム会議	★ 第7回ワークショップ チーム会議	★ 第8回ワークショップ チーム会議	★ 第9回ワークショップ チーム会議	★ 第10回ワークショップ チーム会議	★ 第11回ワークショップ チーム会議	★ 第12回ワークショップ チーム会議	★ 第13回ワークショップ チーム会議
学生満足度 チーム	★ 第5回学生満足度 チーム会議	★ 第6回学生満足度 チーム会議	★ 第7回学生満足度 チーム会議	★ 第8回学生満足度 チーム会議	★ 第9回学生満足度 チーム会議	★ 第10回学生満足度 チーム会議	★ 第11回学生満足度 チーム会議	★ 第12回学生満足度 チーム会議	★ 第13回学生満足度 チーム会議	★ 第14回学生満足度 チーム会議	★ 第15回学生満足度 チーム会議	★ 第16回学生満足度 チーム会議
教育年報 チーム			★ 第4回教育年報 チーム会議	★ 第5回教育年報 チーム会議	★ 第6回教育年報 チーム会議	★ 第7回教育年報 チーム会議	★ 第8回教育年報 チーム会議	★ 第9回教育年報 チーム会議	★ 第10回教育年報 チーム会議	★ 第11回教育年報 チーム会議	★ 第12回教育年報 チーム会議	★ 第13回教育年報 チーム会議
大学院 チーム				★ 第4回大学院 チーム会議	★ 第5回大学院 チーム会議	★ 第6回大学院 チーム会議	★ 第7回大学院 チーム会議	★ 第8回大学院 チーム会議	★ 第9回大学院 チーム会議	★ 第10回大学院 チーム会議	★ 第11回大学院 チーム会議	★ 第12回大学院 チーム会議
その他活動				★ 第4回教育優秀職員 表彰在り方 検討委員会								★ 第13回FD活動報告書 発刊

平成24年度 FD 活動一覧

①. 第5回 T&L CAFE ～授業を語り合う～

日 時：平成25年3月1日（金） 14：00～15：30

参加者数：13名

概 要：

ティーの時間を利用して、リラックスした雰囲気の中で授業や大学教育に関することを気軽に語り合う場づくりとして、今回で5回目を迎えた。

今回は、「教員と学生の新しい関係について」というテーマでディスカッションを行った。

ディスカッションでは、参加者が抱える授業を進める上での課題や苦心、授業工夫で大切にしていることについて報告があり、それらを踏まえて積極的な意見交換が行われた。

なお、実施アンケートの結果から、具体的な意見として「学生の声が聞きたい」や「授業の工夫が聞けてとても参考になった」という声が聞かれた。

②. 第14回 FD フォーラム

日 時：平成24年10月31日（水） 14：00～16：50

テ ー マ：今後のFDの在り方と教育実践の共有

参加者数：124名

プログラム：

【第1部】名城大学における今後のFD活動に向けて

- 1) 今後のFD活動について FD委員会 委員長 森川 章
- 2) 講演：「中部大発『魅力ある授業づくり』～授業サロンという考え方～」
中部大学 大学教育研究センター 副センター長 寺澤 朝子
- 3) 今後のFD活動の学部対応について
理工学部 理工学教育推進センター委員会 委員長 吉久 光一
- 4) フロアディスカッション

【第2部】名城大学の教育改善の取組

- 1) 高大連携による法学導入教育～法学部生と高校生の法律を通じたコミュニケーション（法学部）
- 2) フィールドワーク教育による汎用的技能習得（経済学部）
- 3) 知識技能のアウトプットに着目した薬物療法判断能力の育成プログラム（薬学部）
- 4) 教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化プロジェクト（都市情報学部）

③. 平成24年度前期・後期授業改善アンケート

実施期間：[前期]平成24年7月3日（火）～7月19日（木）

[後期]平成24年12月18日（火）～平成25年1月12日（土）

対象科目：

平成24年度前期・後期に学部の授業を担当する専任教員および非常勤講師を対象とし、専門科目を中心に、最も履修者が多い講義科目において実施した。

実施科目数は前期684科目（学生回答数：延べ48,046件、教員回答数：648件）

後期662科目（学生回答数：延べ40,036件、教員回答数：616件）

概 要：

学生の授業に対する満足度を把握し、改善点・要望事項を把握するとともに、教員の授業に対する意識も調査し、学生・教員間の意識のギャップを確認して、調査結果を今後の授業改善の一助とするために実施した。

集計結果と項目別の改善ポイントは、教員個人にフィードバックしている。また、そのフィードバック結果を基に、授業改善をどのように行っていくかについて、教員からコメントをいただき、冊子にとりまとめている。更に、学部単位におけるFD活動を推進することを旨に、学部・学科別にアンケート集計結果をまとめ、各学部に発信するとともに、アンケート結果全体の分析結果を報告書として取りまとめ、全教員に配布し、授業改善の素材として活用している。

④. 名城大学教育年報第7号発刊

発刊日：平成25年3月

発行部数：730部

概 要：

本学における教育活動の研究・実践活動を共有・蓄積し、広く教育の質の向上に資することを目的として、教育力の向上に資する研究または取り組みについての教育研究論文・教育実践報告を募集した。

全教員および各部局に配布し、他大学にも送付した。

教育年報の種別・内容等は次のとおりである。

	教育研究論文	教育実践報告
定 義	教育理論又は教育実践を対象とする学術的な手続きを踏まえた研究論文	教育実践を対象とした取り組みで、本学および他の大学の学部・研究科・センター・部署の参考になるような報告
投 稿 資 格	名城大学の教職員（教員・事務職員）。本大学の教育に携わる他大学等の教育職員（非常勤講師）の投稿も可。	

第7号では、教育研究論文については3論文の投稿があり、査読審査を経て、3論文を掲載。教育実践報告については内容の確認を経て、2報告を掲載した。

⑤. 大学院教育の底力第2号発刊

発刊日：平成25年3月

発行部数：800部

概 要：

本学の大学院教育の課題を把握するとともに、学生の視野を広げる教育活動の実践事例を収集し、その内容を冊子にまとめた。

⑥. 平成24年度 FD 活動報告書発刊

発刊日：平成25年3月

発行部数：730部

概要：

平成24年度の本学におけるFD活動をまとめたもので、FD委員会の各チームの活動報告や第14回FDフォーラムの報告を掲載した。全教員および各部局に配布し、他大学にも送付した。

⑦. 学外セミナー・研究集会等への派遣

【大学教育開発センターの予算執行分のみ掲載】

	開催日時	主催機関	企画名称	派遣人数
1	4月13日	大学基準協会	2012（平成24）年度大学評価、短期大学認証評価に関する実務説明会	1名
2	5月26～27日	大学教育学会	大学教育学会第34回（2012年）大会	3名
3	6月26日	立命館大学教育開発推進機構	立命館大学教学実践フォーラム	1名
4	7月3日	ベネッセ教育開発センター	ベネッセ大学シンポジウム2012	1名
5	7月14日	河合塾・リアセック	今大学教育に求められるジェネリックスキル	1名
6	8月27～28日	日本リメディアル教育学会	第8回日本リメディアル教育学会	1名
7	10月6日	法政大学	法政大学第10回FDシンポジウム	1名
8	12月6日	全国私立大学FD連携フォーラム	JPPF 会員校ミーティング	1名
9	12月7日	京都高大連携研究協議会	第10回高大連携教育フォーラム	1名
10	12月22日	龍谷大学 大学教育開発センター	第8回 龍谷大学FDフォーラム	1名
11	2月2日	日本学術会議	日本学術会議主催学術フォーラム	1名
12	2月8日	大学評価・学位授与機構	自己評価能力を高めるための目的・計画と指標の作り方に関する研修会	1名
13	2月16日	國學院大學教育開発推進機構	私立大学における学士課程教育と教養教育のこれから	3名
14	2月20日	大学基準協会	大学基準協会における評価受審体制関連事項調査	1名
15	2月23～24日	コンソーシアム京都	2012年度 第18回FDフォーラム	5名
16	3月18日	同志社大学	2012年度 同志社大学 学習支援・教育開発センター 講演会	1名

3. 平成24年度 FD 委員会

平成24年度 FD委員会各チームメンバー表

FD委員会 委員長 森川 章
副委員長 宮嶋 秀光

チーム名	Mission (任務確認)	Planning (目標設定)	メンバー		
			所属	役職	名前
FD 企画 委員会		FD 委員会委員長、副委員長及び各チームの座長がメンバーとなり、各チームの企画に関する連絡調整を行い、諸活動の円滑な運営を図る。	経営学部	教授	◎森川 章
			人間学部	教授	宮嶋 秀光
			都市情報学部	教授	小池 聡
			法学部	教授	肥田 進
			農学部	教授	稲垣 公治
			理工学部	教授	杉村 忠良
			理工学部	教授	成塚 重弥
自主開発 チーム	FD の Mission : 名城大学では、FD 活動を通し、学生及び教職員のモチベーションを最大化する「名城教育力」を自主・自律の探求精神に基づき、持続的に創出する。	名城大学の教育実践の質的向上に向け、授業の工夫等について、互いの経験や知を交換し、継続的に考える場を創りだす。	経済学部	准教授	伊藤 健司
			経済学部	准教授	杉本 大三
			農学部	准教授	前林 正弘
			人間学部	教授	岡戸 浩子
			人間学部	准教授	J.C.ウェストビイ
			都市情報学部	教授	◎小池 聡
ワーク ショップ チーム	「学生主体の探求精神に基づき、持続的に創出する。」	学内外の特色ある教育及びその改善に係わる理論と実践から学び、全学での対話を通じ、教育の質保証の実現に向けた教育方法の研究を推進する。	法学部	教授	◎肥田 進
			法学部	准教授	吉行 幾真
			薬学部	准教授	武田 直仁
			学務センター	事務部長	大脇 肇
			キャリアセンター	主事	今村 栄介
学生 満足度 チーム	FD 活動方針 「学生の主体的な学びを促すための、教育活動の探求・実践および蓄積を目指したFD 環境構築」	授業や教育に対する学生の生の声に耳を傾け、創意工夫を生み出す対話を通じ、学生の主体的な学びを促す教育の研究を推進する。	経営学部	教授	伊藤 秀俊
			農学部	教授	◎稲垣 公治
			薬学部	准教授	大津 史子
			総合学術研究科	教授	加藤 幸久
			経営本部	事務部長	余語 弘
			学務センター	事務部長	田中 敦夫
教育年報 チーム	名城大学における教育活動の研究・実践活動を共有・蓄積し、教育の質の向上に資することを目的とする。		経営学部	教授	謝 憲文
			理工学部	教授	◎杉村 忠良
			都市情報学部	教授	海道 清信
			薬学部	副主幹	田中 賢二
			都市情報学部	主査	富永 武志
大学院 チーム	大学院教育で実践されたFD 事例を収集し、広く学内に公表する。		理工学部	教授	◎成塚 重弥
			法務研究科	教授	佐藤 學
			大学・学校づくり研究科	准教授	中島 英博
			学務センター	課長	東 智志
			入学センター	主事	木下 承大

◎：各チーム座長

* FD 委員会在り方検討委員会

(森川委員長、宮嶋副委員長、小池委員、肥田委員、稲垣委員、成塚委員)

* 教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会

(宮嶋副委員長、杉村委員、前林委員、田中(敦)委員)

平成24年度 FD委員会活動記録

第1回 平成24年4月19日（木）

1. 平成23年度各チーム報告
2. 今後のFD委員会の在り方について

第2回 平成24年7月18日（水）

1. FD委員の交替について
2. 今後のFD活動の在り方について
3. チーム報告

第3回 平成25年1月16日（水）

1. 「学部・研究科主体のFD」に向けた今後のFD活動の在り方について
2. FD委員会要項の一部改正について
3. 教育優秀職員表彰制度の在り方について
4. 教育功労賞要項の新規制定について
5. チーム報告
6. その他
 - ・各刊行物の発刊について

4. 平成24年度各 FD チーム活動報告

自主開発チーム活動報告

自主開発チーム

座長 小池 聡

1. 平成24年度の活動報告

平成24年12月7日（金）および平成25年2月20日（水）に開催されたチーム会議での検討に基づき、「第5回 T&L CAFE（Teaching and Learning CAFE）～授業を語り合う～」を実施した。開催日時は平成25年3月1日（金）14:00~15:30で、場所は昨年同様、天白キャンパス・タワー75の15階レセプションホールであった。プログラムは、ポスターを掲示するなど周知に努めたが参加者が少なかったため、昨年のような小グループに分かれてのワークショップ形式はとらず、「教員と学生との新たな関係について」をメインテーマとして、FD委員を含む参加者十数名が自由に意見を交換する形で進められた。

議論の要点は、次のとおりである。

- 大学と学生との間には、本来ならば、前者が後者を一定水準の思考力や知識・技術等をもつ人材として育て社会に送り出すという契約がある。しかし、高校レベルの基礎学力をもたず自発的に学ぶ意志も欠くような学生が増え、そうした契約が成り立たなくなっている。
- 薬学部の場合は、「薬剤師」資格の取得という目標が明確であり、動機づけとしての早期職場体験を含めた初年次リメディアル教育が、一定の効果을あげている。
- 個々の授業レベルでの“小手先”の改善では不十分である。大学教育を全体的なシステムとして捉え、その中に授業を位置づけ、機能するようにしていく構造改革が必要である。
- アメリカの場合は、5割の学生が卒業できずに大学を去っていく。それと比較して、9割の学生が4年（ないし5年）間で卒業できるというのでは、単位の取得が容易すぎるのではないか。
- 私語に対しては、退室を命じるなど、厳しい対応が必要である。また、私語をする暇を与えないような、授業の進め方（ただ講義を聴かせるだけでなく、話の中で取り上げた具体例を徹底的にノートにとらせるなど）も大切である。

以上の議論を通して、次のような認識を共有するに至る道筋がみえてきたように思われる。

- 個別の授業評価の意味は小さく（無いというわけではない）、実社会との関係を含めてより良い教育システムの構築を図ることが重要である。
- そのことは、“顧客”としての学生の満足を高めることと必ずしも同じではなく、むしろ自ら学ぶ意志を欠いた学生は自然淘汰されるという前提に立つ。

2. 今後の方向性

T&L CAFEは、FD活動の手法として確立したものではない。他大学にも類似事例は少ない。企画を立て実施するものというより、むしろ教員同士が顔を合わせる機会に、自然と開かれるようなものであろう。そうした機会を増やすため、各学部に“教員サロン”のような場所を設ける

ことが望まれる。

FDに関する学部間での情報交換の場としては、FD フォーラムのような形の方が適当である。

また、最近、立命館大学をはじめ、学生FDスタッフを設ける大学が増えている。名古屋地区の私大では、中京大学が平成25年度から導入予定となっている。本学においても、検討すべきことと思われる。そして、学生サイドが主体的に企画・運営するFD交流会が、教員にも参加を呼び掛ける形で開催されることが望まれる。

3. 活動記録（チーム会議）

第4回 平成24年12月7日（金）

1. 第5回 T&L CAFE の企画について

第5回 平成25年2月20日（水）

1. 第5回 T&L CAFE の運営について
 - 1) 参加申込状況について
 - 2) コーディネーターについて

ワークショップチーム活動報告

ワークショップチーム

座長 肥田 進

1. 平成24年度の活動方針

本年度は、本学のFD活動の課題として新たに提言された「学部・研究科主体のFD」という指針に沿ったFDフォーラムを開催することとした。この趣旨に基づき、今回のFDフォーラムは「今後のFDの在り方と教育実践の共有」を全体テーマとすることとし、具体的には他大学、及び本学の幾つかの学部のFD活動の事例報告を中心に企画された。

2. 平成24年度の活動実績

本年度で14回目となるFDフォーラムは、平成24年10月31日（水）に開催された。その全体テーマは上述の通り、「今後のFDの在り方と教育実践の共有」と設定され、昨年度に引き続き2部構成で行われた。参加者は、本学教職員、学生、及び他大学関係者を併せて合計124名で、前年度の134名を若干下回った。参加率は教育職員が12.6%、事務職員が16.5%であった。

< FDフォーラムの概要 >

上記の通り、FDフォーラムは2部構成で行われた。まず第1部では「名城大学における今後のFD活動に向けて」との基本テーマの下、最初に本学のFD委員会委員長である森川章副学長から、本学の今後のFD活動に関する基本方針が示された。次いで中部大学大学教育研究センター副センター長の寺澤朝子氏（経営情報学部教授）によって「中部大発『魅力ある授業づくり』～授業サロンという考え方～」と題する講演が行われ、さらに本学理工学部の理工学教育推進センター委員会委員長の吉久光一教授による「今後のFD活動の学部対応について」と題する理工学部の取り組みに関する報告が行われた。寺澤氏の講演では、中部大学で試みられている教員のキャリアアッププログラムが紹介され、特にその一環として実践報告された「授業サロン」の試みには高い関心が示された。

第1部に引き続き第2部では、下記の4つの学部から平成23年度「教育の質保証プロジェクト」における教育改善の取り組みの具体例が各課題の通り報告された。

法学部：高大連携による法学導入教育～法学部生と高校生の法律を通じたコミュニケーション

経済学部：フィールドワーク教育による汎用的技能習得

薬学部：知識技能のアウトプットに着目した薬物療法判断能力の育成プログラム

都市情報学部：教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化プロジェクト

フォーラムの最後は森川委員長による総括が行われ、中部大学や本学の教育実践の取り組みに関する報告は本学の「学部・研究科主体のFD」を推進する上で大いに参考になるとの評価が示された。

3. 平成25年度への課題

FD フォーラムのあり方については、「学部・研究科主体のFD」という基本方針に沿って、その形式、テーマの設定、プログラム構成などを検討する必要があると思われるが、来年度の具体的な内容については次年度の委員会に検討を委ねたい。

4. 活動記録（チーム会議）

第4回 平成24年7月17日（火）

1. 第14回 FD フォーラムの企画について

第5回 平成24年7月31日（火）

1. 第14回 FD フォーラムの企画について

第6回 平成24年11月12日（月）

1. 第14回 FD フォーラムについて
2. 法政大学 FD シンポジウム報告

学生満足度チーム活動報告

学生満足度チーム

座長 稲垣 公 治

1. 平成24年度の活動

概要：平成23年度までは後期の講義終了時の14～15回目に授業アンケート調査を実施していたが、24年度からは前期と後期の2回に分けて、やはり講義終了時に実施することになった。このうち前期の調査（7月3日～19日実施）は750授業中、91.2%にあたる684授業で、また後期の調査（12月18日～1月12日実施）は707授業中、93.6%にあたる662授業で、それぞれ行われた。アンケート結果のフィードバック：23年度後期、24年度前・後期の調査結果を各学部・学科ごとに集計し、各学部等に組織的活用をしていただくべく配布した。さらに、調査結果について本満足度チームで議論を重ねたところ、「授業の分かり易さ」、「板書・パワーポイントの文字」、「面白く興味がわく授業」の3点が学生の授業満足度に極めて重要なポイントであることが確認された。そこで、24年度後期の授業開始直後に各学部FD委員を通して全学の教員に対して、授業改善目標として上記3点に重点をおいていただくよう依頼した。この結果、24年度後期の調査結果では、「授業の分かりやすさ」については改善され、「板書、パワーポイントの文字」、「面白く興味がわく授業」については若干の改善が見られた。

2. 平成25年度への課題

平成20年度より24年前期までの授業満足度の変化を見ると、20年度の「強く満足」、「やや満足」の合計値は48%、以後少しずつ上昇して24年度には59%となり、近年、授業担当者の授業改善努力がなされてきていることがうかがわれるが、学生の記述事項（教員への要望事項）からは1における3つのポイントが、相変わらず毎回非常に多く見受けられる。これらのポイントは授業実施のうえで最も基本的な事柄であるにもかかわらず、毎回の調査で頻繁に指摘があることは、教員側にとって真剣に考える必要がある。また、前述のように、近年、全学的には授業改善が徐々に浸透しつつあり、FD委員会から各学部FD委員会への働きかけに一定の効果が出てきたのではと考えられるが、学生の記述事項をみると「授業実施における学生に対する教員の姿勢」、「半年、1年前と現在との改善度比較」などに関して教員個人への問題提起も極めて多く、最今、組織的なFD活動の展開が強く要請されているが、組織から個人レベルに向けたFD活動のあり方にも焦点を当てる必要があると思われる。

3. 活動記録（チーム会議）

第5回 平成24年4月17日（水）

1. 平成23年度後期授業改善アンケート結果の取り扱いについて
2. 平成24年度授業改善アンケートについて

第6回 平成24年5月24日(水)

1. 平成23年度後期授業改善アンケート結果の学部へのフィードバックについて
2. 平成24年度授業改善アンケートについて

第7回 平成24年10月3日(水)

1. 平成24年度前期授業改善アンケート結果について
2. 平成24年度後期授業改善アンケートについて
3. 平成25年度後期授業改善アンケートについて

第8回 平成25年3月8日(金)

1. 平成24年度授業改善アンケート結果について
 - (1) アンケート結果の報告
 - (2) 各学部への結果のフィードバック
 - (3) 次年度以降の課題について
 - (4) 全体報告書の刊行について
2. 授業改善アンケートの処理について
 - (1) アンケートの回収作業について
 - (2) 教員コメントの扱いについて
3. その他
FD ニュースの取扱いについて

教育年報チーム活動報告

教育年報チーム

座長 杉村 忠良

1. 編集方針の概略

「名城大学教育年報」の編集方針が新しく確立されたのは、平成21年度である。教育年報の募集要項に関する詳細は、毎年年報の「資料」に記載されている。本年報は、「教育研究論文」と「教育実践報告」からなる。教育研究論文は査読者2人による厳正な査読ルールに基づいて掲載の可否がつけられるものであり、教育実践報告は基本的には査読なしで掲載が許可されるものである。なお、基本的には査読なしといえども、最低限の内容と構成はチェックされる。

FD活動にかかわる「教育実践報告」や「教育研究論文」は、学内者だけでなく学内者と関連する学外者からも広く集められ、適切なる仕分けをして継続的に実のある「教育年報」を作成することが、本チームの主たる業務である。

2. 編集作業の流れ

平成24年度の「名城大学教育年報」原稿募集には、「1.教育年報の目的 2.投稿資格 3.投稿内容 4.投稿原稿の構成と表記 5.審査 6.原稿料 7.原稿の責任と権利 8.提出について」とほぼ例年通りの内容が示されている。昨年度との変更点は、投稿原稿の枚数が10ページから8ページへ縮小されたことである。「審査」項目に関連した注意事項として、査読後に内容の一部修正を指示された場合を除いて「提出後の原稿の差し替えは認められない」ことも明記されている。万全を配して、提出期限平成24年10月31日必着のもとに原稿募集が実施された。事務職員の適確なる業務により、編集上のルールや作業マニュアルに従って編集作業は1部をのぞいて順調に進められた。

本年度は「教育研究論文」として3編が投稿された。査読は規定どおり、外部査読者を加えて行われ、査読結果は3編中3編が掲載可となった。一方「教育実践報告」としては2編が投稿され、規定どおりすべて掲載可となった。

3. 本年度の実施事項と今後の問題点

本年度新しく実行した内容は次のとおりである。1.投稿原稿の枚数変更。2.教育研究論文については査読希望者3人を明記することができる。3.投稿者の所属に対する記載方法の統一。4.掲載の最終決定は年報チームに依存する。

今後の問題として確認された項目を列挙すると次のとおりである。

1. 論文査読者の選出を適切に実行するために、これまでの査読者リストを作成する。
2. 論文の形式（脚注）の表記法等については、名城大学としての整合性を取るために、総合研究所発刊の「総合学術研究論文集」「紀要」の投稿規則を参考にする。
3. 論文査読における審査基準を統一化するために、修正意見を段階的に示すようにする。例

えば「修正すべき箇所」・「参考意見」等のポイントを指摘するようにする。

4. 投稿数の減少の対策として、教育功労賞受賞者に特別寄稿依頼してはどうか。

5. 教育実践報告には査読がないので、年報の質的基準を設定する必要がある。

本チームの更なる編集作業円滑化のために、以上の項目を今後の課題としたい。

4. 活動記録（チーム会議）

第4回 平成24年7月27日（金）

1. 平成23年度 名城大学教育年報（第6号）の課題等について
2. 平成24年度 名城大学教育年報（第7号）の発刊に向けて

第5回 平成24年11月14日（水）

1. 平成24年度名城大学教育年報投稿について（報告）
2. 教育研究論文の査読者および教育実践報告の確認者について
3. その他
 - ・投稿者の所属の英文表記について
 - ・共同執筆の場合の分担表記について
 - ・査読者及び確認者への謝礼について

第6回 平成24年12月25日（火）

1. 平成24年度名城大学教育年報の査読結果について
2. 教育実践報告の最終確認者について
3. その他

①名城大学教育年報募集要項における教育研究論文・教育実践報告の区分について

第7回 平成25年1月29日（火）

1. 教育研究論文の掲載可否判定結果および教育実践報告の確認結果について
2. 教育年報第7号刊行にあたり確認された課題等について

大学院チーム活動報告

大学院チーム

座長 成 塚 重 弥

1. 平成24年度の活動方針

今年度の活動方針は、昨年度に引き続き、名城大学の大学院教育の実態把握を進めるとともに、学生の視野を広げる教育活動を実践している事例を収集・共有し、大学院教育を考える機会とすることとした。大学院教育の状況は研究科毎に大きく異なり、他研究科の様子を知る機会も極めて少ない。従って、教育活動の事例を収集・共有することにより相互認識を深めるとともに、大学院教育に関する基礎的なデータを収集・共有することで大学院の全体像の把握を進めることが重要となる。

2. 平成24年度の活動内容

上記の活動方針の実行のため、以下の3本柱の編集方針のもとに冊子「大学院教育の底力」の作成へ向けた編集活動をおこなった。

- ① 専門分野の研究以外の幅広い視野を養う、教育の側面支援に関する活動に着目し、ユニークな教育の取組をインタビューする。
- ② 大学院の教育の実態把握のための、基礎データとするためのインタビューを実施する。
- ③ 大学院に関する統計データ（学位授与数、在籍者数、進路等）を収集する。

忙しい教員でも空いた時間にすばやく内容を把握できるよう、記事の長さ、興味を引く表題、見やすい図、写真の添付などに注意を払い、大部分の記事を改訂した。また、大学院に関する統計データにはコメントをつけ、そこから読み取れる内容を膨らませた。

以上の作業をチームの各委員が分担し、各取材の取りまとめとともに、原稿の改訂をおこない、最終原稿を第5回チーム会議に持ち寄り、検討の上、冊子の印刷・出版への運びとなった。

3. 平成25年度への課題

以上の取り組みから、大学院教育の実態、問題点などがいくつか浮き上がった。今後、さらなる規模での大学院生へのアンケートを実施し、大学院の実態の把握を進めるとともに、これら問題点への対応が重要である。今回の統計データ調査からも、例えば、法務研究科では、社会人教育がかなりの規模ですでに実施されつつあること、大学院全体としては外国からの留学生が近年増加していること、また、専門性の高い人材の輩出が社会から強く要望されていることなど、が読み取れた。これらを受けて、社会人のステップアップ教育の場としての大学院、留学生を含めたグローバル教育に対応できる大学院、充実したプロフェッショナル教育を提供する大学院への対応が、大学院の重要性を高める意味でも大切となるものと思われる。また、日本再生のため、日本人学生の博士課程への進学促進も重要な課題であり、博士課程学生の補助の充実（生活費、就職先の確保、地位の向上）が国レベルでも重要な課題になるものと考えられる。

4. 活動記録（チーム会議）

第4回 平成24年12月26日（水）

1. 平成23年度大学院チームの活動について
2. 平成24年度大学院チームの活動について

第5回 平成25年2月7日（木）

1. 「大学院教育の底力」の原稿の確認・編集について

5. トピックス

第14回 FD フォーラム実施報告

10月31日（水）、天白キャンパス11号館5階504教室において、第14回 FD フォーラム（主催：FD 委員会・大学教育開発センター）を開催した。今回は、「今後の FD の在り方と教育実践の共有」をテーマとし、教職員、学生、他大学関係者等124名が参加して行った。



はじめに、中根敏晴学長から、本フォーラムを通して、各学部等における主体的な FD 活動の参考としていただきたいとの開会挨拶があり、肥田進 FD 委員会ワークショップチーム座長から、学部・研究科主体の FD 推進に向け、「今後の FD の在り方と教育実践の共有」を全体テーマとして企画したので、他大学や他学部の FD や教育改善の事例に触れ、互いの実践に学ぶ機会としていただきたいとの趣旨説明があった。

第1部は、「名城大学における今後の FD 活動に向けて」という内容で、はじめに「学部・研究科主体の FD 推進」に向けた今後の FD 活動の方向性について、森川章 FD 委員会委員長からお話しいただいた。

続いて、中部大学の寺澤朝子教授（大学教育研究センター副センター長）を迎え、「中部大発『魅力ある授業づくり』～授業サロンという考え方～」をテーマに、中部大学の FD 実践事例等について講演が行われた。中部大学が取り組んでいる「魅力ある授業づくり」の取組として、授業サロンの事例紹介を中心に、FD に関する組織体制としては、各学部に FD 委員会をおき、各学部・学科単位で FD 活動を進めていること、学部・学科の FD 活動は、全学 FD 委員会へ報告し、「FD 活動自己点検評価報告書」としてまとめていることなどについて、お話しいただいた。



続いて、今後の FD 活動の学部対応について、理工学部吉久光一教授（理工学教育推進センター委員会委員長）から、JABEE の取組および、理工学教育推進センター委員会の活動を中心とした、理工学部の教育改善の事例等をお話しいただいた後、フロアディスカッションを行った。

第2部は、「名城大学の教育改善の取組」として、法学部、経済学部、薬学部、都市情報学部から、平成23年度「教育の質保証プロジェクト」における教育改善の取組をご発表いただいた。

①「高大連携による法学導入教育～法学部生と高校生の法律を通じたコミュニケーション」(発表者：法学部 伊川正樹准教授、前田智彦准教授)

プロジェクトの柱である、特設科目「実践法教育」の実施、法実務の現場を知る、入学前教育の教材開発の3つの柱について、それぞれの成果と課題を含めた発表があった。



②「フィールドワーク教育による汎用的技能修得」(発表者：経済学部 山本雄吾教授)

フィールドワーク科目の事例紹介があり、フィールドワークを通して、コミュニケーション能力、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力の汎用的技能(学士力)修得につながっているとの発表があった。

③「知識技能のアウトプットに着目した薬物療法判断能力の育成プログラム」(発表者：薬学部 大津史子准教授)

問題解決能力の育成を目的としたPBL形式のカリキュラム「薬物治療学」について、開発された薬物療法判断のシミュレーションプログラムの動画を見ながら、その学習効果、今後の発展等についての発表があった。



④「教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化プロジェクト」(発表者：都市情報学部 大野栄治教授)
現場の実務家を取り込んだ地域連携教育プログラムの開発と、教育と実務の現場力を融合・強化する講座の実施として、講義科目「事業の評価」の取組を中心とした発表があった。

最後に、森川章FD委員会委員長から、今後も各学部等の教育改善の経験交流を進めていながら各学部・研究科主体のFD活動を推進していきたいとの総括をもって、第14回FDフォーラムを終了した。



第14回FDフォーラム

今後のFDの在り方と 教育実践の共有

平成24年
日 10月31日(水)
時 13:30~16:30

会場
名城大学
天白キャンパス
11号館5階 504特別教室

参加費、事前申込みは不要です。
多数のご参加をお待ちしています。

プログラム

12:30~12:40 開会挨拶
森川 章

12:40~15:10 **【第1部】** 名城大学における今後のFD活動に向けて
1. 今後のFD活動について
2. 講演:「中部大発『魅力ある授業づくり』~授業サロンという考え方~」
3. 今後のFD活動の学部対応について
4. フロアディスカッション

15:20~16:20 **【第2部】** 名城大学の教育改善の取組
1. 高大連携による法学導入教育~法学部生と高校生の法律を通じたコミュニケーション
2. フィールドワーク教育による汎用的技能習得
3. 知識技能のアウトプットに着目した薬物療法判断能力の育成プログラム
4. 教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化プロジェクト

16:20~16:30 閉会挨拶
森川 章

主催:名城大学FD委員会、大学教育研究センター



平成24年度 第14回FDフォーラム プログラム
『今後のFDの在り方と教育実践の共有』

開会挨拶 学長 中根 敏晴

第1部 名城大学における今後のFD活動に向けて

1. 今後のFD活動について FD委員会 委員長 森川 章
2. 講演:「中部大発『魅力ある授業づくり』~授業サロンという考え方~」
中部大学 大学教育研究センター 副センター長 寺澤 朝子
3. 今後のFD活動の学部対応について
理工学部 理工学教育推進センター委員会 委員長 吉久 光一
4. フロアディスカッション

第2部 名城大学の教育改善の取組

1. 高大連携による法学導入教育~法学部生と高校生の法律を通じたコミュニケーション
法学部 伊川正樹准教授、前田智彦准教授
2. フィールドワーク教育による汎用的技能習得 経済学部 山本雄吾教授
3. 知識技能のアウトプットに着目した薬物療法判断能力の育成プログラム
薬学部 大津史子准教授
4. 教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化プロジェクト
都市情報学部 大野栄治教授

閉会挨拶 FD委員会委員長 森川 章

第14回 FDフォーラム 所属別参加状況

	所属人数 (※1)	FDフォーラム		
		参加人数	参加率	前回参加人数
教育職員				
学長・副学長	3	3	100.0%	2
法学部	39	5	12.8%	4
経営学部	31	2	6.5%	8
経済学部	28	7	25.0%	11
理工学部	174	10	5.7%	10
農学部	47	4	8.5%	8
薬学部	68	11	16.2%	9
都市情報学部	27	1	3.7%	0
人間学部	22	14	63.6%	11
大学院理工学研究科	2	0	0.0%	0
大学院法務研究科	17	0	0.0%	0
総合学術研究科	1	0	0.0%	0
大学院大学・学校づくり研究科	6	1	16.7%	0
教職センター	6	0	0.0%	1
情報センター	2	1	50.0%	2
総合研究所	2	0	0.0%	0
総合数理教育センター	2	1	50.0%	1
大学教育開発センター	6	1	16.7%	1
小計1	483	61	12.6%	68
非常勤講師	—	0	—	2
小計2	—	61	—	70
事務職員				
監査室	3	0	0.0%	0
秘書室	5	1	20.0%	1
経営本部	8	0	0.0%	2
MS-15 推進室	—	—	—	—
新学部開設準備室	2	0	0.0%	0
総合政策部	8	6	75.0%	3
総務部	15	2	13.3%	1
渉外部	9	2	22.2%	—
財政部	15	3	20.0%	7
施設部	15	0	0.0%	2
入学センター	12	0	0.0%	0
学務センター	38	5	13.2%	10
保健センター	10	0	0.0%	0
大学教育開発センター	7	6	85.7%	7
学術研究支援センター	18	3	16.7%	1
キャリアセンター	19	2	10.5%	1
国際交流センター	5	0	0.0%	1
情報センター	8	0	0.0%	0
附属図書館	7	1	14.3%	1
法学部	6	1	16.7%	1
経営学部	7	1	14.3%	0
経済学部	6	2	33.3%	1
理工学部	20	8	40.0%	0
農学部	15	0	0.0%	1
薬学部	11	2	18.2%	2
都市情報学部	10	1	10.0%	1
人間学部	5	2	40.0%	2
附属高校	7	0	0.0%	0
小計	291	48	16.5%	45
役員				
役員 (※2)	7	2	28.6%	4
その他				
附属高等学校教諭	97	0	0.0%	0
学部生・大学院生	—	1	—	2
その他	—	12	—	13
小計	—	—	—	15
合計	878	124	—	134

※1 平成24年度所属人数（教員…助手を含む。特任教授は含まない。／事務職員…契約職員を含む。派遣職員は含まない。）

※2 学長・副学長は除く。（教育職員「学長・副学長」に含む。）

**第14回FDフォーラム
参加者アンケート集計結果**

1. 参加者のデータ

① 参加者の属性 (表)

所属等		出席人数 (人)	在籍者数 (人)	各部門の 参加率 (%)	参加者の 構成比率 (%)	学内外 人数 (人)	学内外 比率 (%)
名城 大 学	法 学 部	5	39	12.8%	4.0%	113	91.1%
	経 営 学 部	2	31	6.5%	1.6%		
	経 済 学 部	7	28	25.0%	5.6%		
	理 工 学 部	10	174	5.7%	8.1%		
	農 学 部	4	47	8.5%	3.2%		
	薬 学 部	11	68	16.2%	8.9%		
	都市情報学部	1	27	3.7%	0.8%		
	人 間 学 部	14	22	63.6%	11.3%		
	センター合計	3	16	18.8%	2.4%		
	研究科合計	1	38	2.6%	0.8%		
	事 務 職 員	48	291	16.5%	38.7%		
	非常勤講師	0	—	—	0.0%		
	研 究 員	0	—	—	0.0%		
	役 員	5	10	50.0%	4.0%		
	学 部 学 生	1	—	—	0.8%		
そ の 他	1	—	—	0.8%			
他 大 学	教 育 職 員	4	—	—	3.2%	11	8.9%
	事 務 職 員	4	—	—	3.2%		
	民 間 企 業	1	—	—	0.8%		
	他 大 学 生	2	—	—	1.6%		
	そ の 他	0	—	—	0.0%		
計		124			100.0%	124	100.0%

2. アンケートデータ

① アンケート回答者の属性（表）

所属等		回答者数（人）
名城大学	専任教員	30
	非常勤講師	0
	職員	24
	大学院生	0
	学部学生	1
	その他	0
他大学	教員	4
	職員	4
高等学校	教員	0
	職員	1
その他		4
計		68

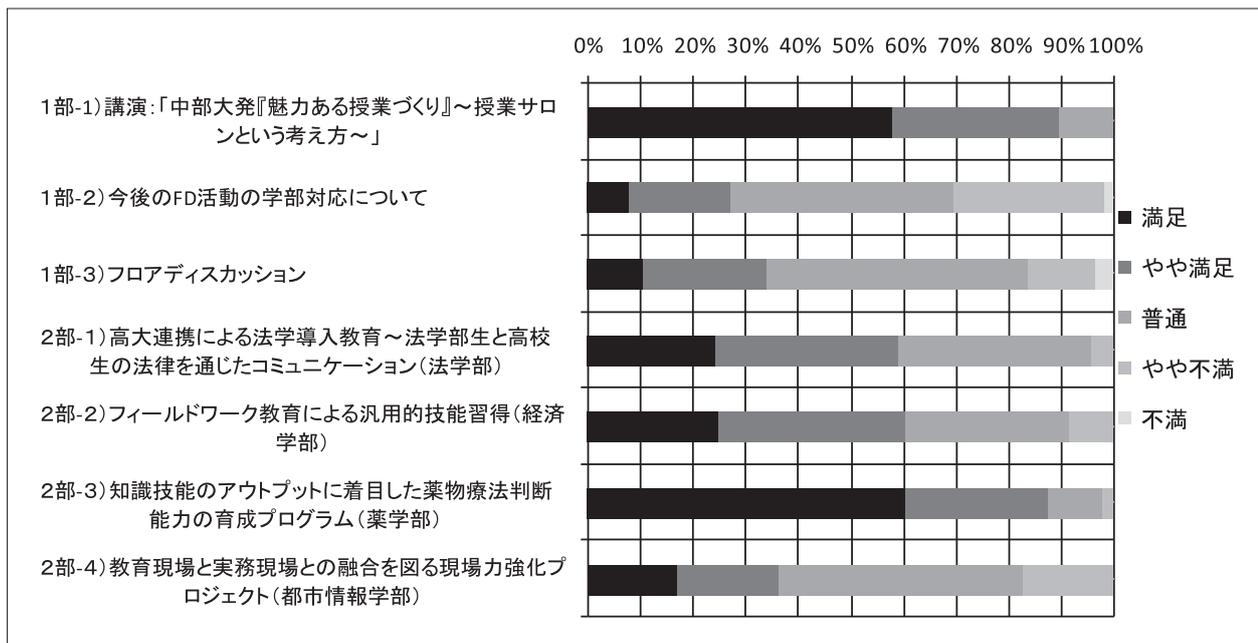
② 各プログラムの満足度（表）

第1部 名城大学における今後のFD活動に向けて セッション名	各項目の回答者数（人）					計
	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	
1) 講演：「中部大発『魅力ある授業づくり』 ～授業サロンという考え方～」	39	21	7	0	0	67
2) 今後のFD活動の学部対応について	5	12	27	18	1	63
3) フロアディスカッション	6	13	28	7	2	56

第2部 名城大学の教育改善の取組 セッション名	各項目の回答者数（人）					計
	満足	やや満足	普通	やや不満	不満	
1) 高大連携による法学導入教育～法学部生と 高校生の法律を通じたコミュニケーション(法学部)	12	17	18	2	0	49
2) フィールドワーク教育による汎用的技能習得 (経済学部)	12	17	15	4	0	48
3) 知識技能のアウトプットに着目した薬物療法 判断能力の育成プログラム(薬学部)	29	13	5	1	0	48
4) 教育現場と実務現場との融合を図る現場力強化 プロジェクト(都市情報学部)	7	8	19	7	0	41

(重複回答は述べ件数としてカウント、未記載はカウントせず)

③ 各プログラムの満足度（グラフ）



3. 今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて（自由記述まとめ）

【FDの在り方】

- 「強制ではなくやんわりとしたアプローチ」という考え方に共感した。（教員）
- 学生にいかに関心を持たせる事ができるか、をどのように実践するかが重要。（教員）
- 大学全体としての目標と、教員個人の目標をいかに位置付けるかが重要。（教員）
- 職員も裁量任せではなく、主体的に関わるべきと感じた。（職員）
- 学生を甘やかしすぎではないか。（学生）

【FDに対する改善案】

- 個人単位ではなく、グループあるいは学部・大学単位でのFDが大事。（教員）
- 初年次教育を特に重視したい。（教員）
- 授業サロンの試みは、自身の授業の進め方を客観化する上で面白い。（教員）
- 学部学科に関係なく、経験を交流できる機会を作る事。（職員）

【大学への要望】

- 新任教員への授業技術研修を実施してほしい。（教員）
- 教育改善への努力をより評価してほしい。（教員）
- マクロな視点でFD活動を行う為には、目標設定が必要では。（教員）

【FDフォーラムを通じた参加者の感想】

- 中部大の取組を聞いて、組織的な取組が大事である事が理解できた。（教員）
- 成果計測と、結果を受け止めつつ、活動を長期的に発展させていく事が大事。（教員）
- 小手先だけのFDでは不十分なのだと感じた。（教員）
- 2部のあり方に工夫が必要ではないか？（1部に比べてトーンが落ちている）（職員）
- FDを実施する多角的視点と組織作り、公開方法の工夫など、大変勉強になった。（教員）
- 教員の参加人数が少ないと感じた。（教員）
- 発表者の意欲は高いが、それを共有する教員の数が少ない事が問題。（教員）

【その他】

- タイムオーバーがあったので、内容のボリュームと時間をマッチングしてほしい。（教員）

4. 第2部の4学部の教育の改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどあればお聞かせください。

【教育改善の必要性】

- 高校時代からの継続した学部入門教育の実践が必要。(教員)
- 高大連携の範囲を広げていきたい。(職員)

【教育改善の方法】

- 推進組織の明確化と共に推進者の増大を図る。(教員)
- 授業が社会で役立っているかを調査すべく卒業生アンケートを実施したい。(教員)
- 事例報告の更なる活性化。(職員)
- より大きいグループでの実践。(教員)
- 今回の取組はいずれも素晴らしいが、ボランティアに依る所が大きく、学部・学科レベルでの取組を模索すべき。(教員)

【その他】

- FD事務局に専任・兼任スタッフが置かれている事に感心した。(他大学教員)

5. FDフォーラムで取り扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたら下記にご記入ください。

【学びに対する動機づけ】

- 授業外学習の設計 望ましい教室デザインについて。(高校教員)
- 取組を直にうけた学生の生の声を聞いてみたい。(職員)
- 専門分野を学び始めた学生のモチベーションをいかにあげるか。(教員)

【教え方】

- クリッカーなど双方向性授業をする為のツールの紹介。(教員)
- 授業における発声やプレゼン方法、新任教員への研修等の講習をやってほしい。(教員)

【本学の教育改善取組等の取組等】

- 今後の課題についてディスカッションする場がほしい。(職員)
- 教育改善努力を評価する大学の取組が必要。(教員)

【他大学等事例の報告】

- 他大学でのFD取組事例の講演は面白かった。(教員)
- 失敗事例等、もう少し見識を深められるような内容も聞いてみたい。(教員)

第14回FDフォーラムアンケート 平成24年10月31日(水)

本日は第14回FDフォーラムにご参加いただきありがとうございました。
 今後のフォーラムの企画をはじめ、FD活動の取り組みにおいて参考になるご意見をいただきたいと思しますので、本アンケートにご回答くださいますようご協力をお願いいたします。いただきましたアンケートのご意見は、今後の取り組みの参考にさせていただきます。ご記入後は受付に回収箱を用意していますので、退出の際にお入れください。

1. あなたについてお聞かせください。(該当するものに○をつけてください)

- 【名城大学】 1.専任教員 2.非常勤講師 3.職員 4.大学院生 5.学部学生 6.その他 ()
 【他大学】 7.教員 8.職員
 【高等学校】 9.教員 10.職員
 【その他】 11.その他 ()

2. 本日の企画内容についてお聞かせください。

プログラム名	該当するものに○をつけてください。				
第1部 名城大学における今後のFD活動に向けて					
1) 講演：「中部大発『魅力ある授業づくり』 ～授業サロンという考え方～」	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
2) 今後のFD活動の学部対応について	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
3) フロアディスカッション	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
第2部 名城大学の教育改善の取組					
1) 高大連携による法学導入教育～法学部生と高 校生の法律を通じたコミュニケーション (法学部)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
2) フィールドワーク教育による汎用的技能習得 (経済学部)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
3) 知識技能のアウトプットに着目した薬物療法 判断能力の育成プログラム(薬学部)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
4) 教育現場と実務現場との融合を図る現場力強 化プロジェクト(都市情報学部)	1.満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満

3. 今回のフォーラムの中で、一番関心を持ったポイント、重要だと感じたポイントについて、具体的にお聞かせください。

- *****
4. 第2部の4学部の教育改善の取組をお聞きになって、所属学部等の教育改善を進める上でヒントになったことなどがあればお聞かせください。

()

5. FDのフォーラムで扱ってほしいテーマや企画内容等について、ご意見・ご要望がございましたら下記にご記入ください。

()

ご協力ありがとうございました。
名城大学 FD委員会

当日配布資料

講演「中部大発『魅力ある授業づくり』～授業サロンという考え方～」

中部大学 大学教育研究センター 副センター長 寺澤朝子 教授

1

名城大学FDフォーラム
中部大発『魅力ある授業づくり』
～授業サロンという考え方～

中部大学大学教育研究センター
副センター長 寺澤朝子

CHUBU UNIVERSITY

2

CHUBU UNIVERSITY

本日の講演のねらい

- ・中部大学のFD活動の特徴をわかりやすく伝える。
- ・「魅力ある授業づくり」について、会場の皆さんと一緒に考える。

3

CHUBU UNIVERSITY

- 本日の講演内容
- FD活動に絡むパラドキシカルな状況
- 中部大学の紹介
- 「魅力ある授業づくり」の取り組み
- 授業サロン
- FDに関する組織体制
- 今後の展開に向けて

4

CHUBU UNIVERSITY FD活動に絡むパラドキシカルな状況

わずか10年間で大学を取り巻く環境がいかに変わったか？

- ・ユニバーサル化(大学全入時代)への対応
19歳人口は減っているのに、大学は増えている。
- ・新卒就職者に占める大卒者の割合は、「高卒+専門学校卒」よりも多い。
10年前は、高卒と同程度、「高卒+専門学校卒」の方がはるかに多かった。

教育内容・教育方法ともに、10年前(あるいは数年前)のものではすでに対応できないほど、変化の激しい環境に大学は置かれている

5

CHUBU UNIVERSITY FD活動に絡むパラドキシカルな状況

だからこそこの「FDの義務化」、でも・・・

FDとは、「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称」

大学教員が感じる(であろう)教育活動に関するディレンマ

- ①教授法の画一化の懸念
- ②教育にかかる時間の増大と研究時間の減少
- ③教育業績は評価されない「やらされ感」

そのディレンマの中で、どこに自分の立ち位置を決めるのか？



6

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の紹介



愛知県春日井市 <2012.5.1現在>

7学部	29学科	学生数	:10,088人
5研究科	15専攻	院生数	: 312人
		専任教員数	: 515人

7

CHUBU UNIVERSITY 中部大学の紹介

公式なものではありませんが……

中部大学の魅力

- 1 建学の精神
「不言実行—あてになる人間の育成—」
- 2 学部・学科のバリエーションが多い
理系・文系・資格系とあらゆるタイプの学部がそろっている上に、教育系の学部を持っている。
- 3 7学部がワンキャンパスに集結している。



8

CHUBU UNIVERSITY 「魅力ある授業づくり」の取り組み

**「魅力ある授業づくり」
6つの取り組み**

- 1 「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」の実施
- 2 「授業改善アンケート」システムの提供
*『Cumoc(キューモ):Chubu University Mobile Clicker』は、受講生が携帯電話やパソコンを利用して回答するクリックカーシステムです。Cumocは、本学独自に開発したシステムで、教務データ(履修データ)と連携しており、大学院を含むすべての授業にて利用可能です。また、このCumocを利用して授業評価にも参加できます。

9

CHUBU UNIVERSITY 「魅力ある授業づくり」の取り組み

- 3 授業改善ビデオ撮影支援
- 4 授業のオープン化制度
- 5 全学公開授業
- 6 授業サロン★



10

CHUBU UNIVERSITY 「魅力ある授業づくり」の取り組み

その他のFD活動として次のような項目を実施しています。

- 教育活動重点目標・自己評価シート
- FDフォーラム・FD講演会
- 教育活動顕彰制度
- FD活動支援経費の補助
- 教員キャリアアッププログラム



11

CHUBU UNIVERSITY 「魅力ある授業づくり」の取り組み

教員キャリアアッププログラム

プログラム例

- ・「グループワークの効果的な進め方」
- ・講義のための「話し方の基本」
- ・授業時間外学習を促すシラバスの書き方
- ・授業の双方向性を高めるCumoc(キューモ)の活用
- ・より良い授業のための留意点(話し言葉に着目して) etc

学内外の講師によりワークショップ形式を導入した実践的なプログラム。2009年度秋学期から現在までに、18回開催しています。




ワークショップ風景 発声練習風景

12

CHUBU UNIVERSITY 授業サロン

授業サロン

異なる分野、文理の壁を越えた教員(5人)が、互いの授業見学を行い、授業の考え方、学生の反応、問題点、工夫、改善案等について、情報交換・意見交換(異種格闘・交流)を通じて、教育上における問題対応策など授業改善のヒントを見出す。学部を超えたFDネットワークを広げることも目的。2008年度秋学期から現在まで、10グループ実施。




授業見学 意見交換会

CHUBU UNIVERSITY 授業サロン

授業サロンの流れと概要

- 事前打合せ・・・メンバー紹介、今後の運営方針
スケジュール調整（授業見学・意見交換会日程）
- 授業見学・・・メンバー全員各1回公開し、計5回（見学は4回）※本人の振り返り、見学できなかったメンバー用に、授業改善ビデオ撮影支援制度を活用して、当該授業を撮影
- 意見交換会・・・資料に沿って各メンバーの授業に関する意見交換（まとめ）

授業サロン作成資料
 授業担当者： 授業紹介シート（授業見学前に記入して配付）
 授業の振り返りシート（授業見学終了後に記入）
 その他（シラバス、授業配布資料など）
 授業見学者： 授業見学コメントシート（授業見学後に記入して提出）

CHUBU UNIVERSITY 授業サロン

■授業サロンの特徴・メリット

- ①専門分野の異なる教員によるグループ構成
- ②授業内容ではなく、授業運営に着目した見学
- ③自分自身のふりかえりを促す機会の提供
- ④ピア・コンサルティング
- ⑤教員間のFDネットワークの構築
- ⑥サロンの結果はあえて共有しない◎

CHUBU UNIVERSITY FDに関する組織体制

FD組織体制

◆FD委員会
 本学のFD活動全般について学長を委員長として審議、検討をする。

◆FD活動WG (ワーキンググループ)
 FD委員会の専門委員会として、学部代表のFD委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

◆FD活動評価点検委員会
 本学のFD活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検する。

◆教育活動顕彰審査選考委員会
 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

※ 主要部署：大学教育研究センター

図1 中部大学のFD活動組織図

CHUBU UNIVERSITY FDに関する組織体制

■学部・学科の取り組みに関して

* 中部大学では、各学部・学科にFD委員会をおき、各学部・学科単位でFD活動を進めるかたちをとっています。

学部・学科のFD活動を、全学FD委員会へ報告。
 →「FD活動自己点検評価報告書」としてまとめる。

提出書類
 ・重点目標シート提出の義務付け
 ・学部・学科のFDに関する目標の提示と評価

CHUBU UNIVERSITY FDに関する組織体制

「学部・学科での主体的なFD活動」を推進するための具体策に向けて

- 上から担当者を決めてしまわない方がよい。⇒「やらされ感」の醸成
- 学部・学科の中で数人のグループ単位で動けるようにする。(教員ネットワークの構築)
- 気軽に参加できるように、活動のテーマを工夫する。(軽い情報交換から始めてみる)

* 中部大学の大学教育研究センターでは、強制ではなくやんわりとしたアプローチで、学部・学科のFDの器づくりをサポートしようとしています。

CHUBU UNIVERSITY 「魅力ある授業づくり」の取り組み

中部大学のFD活動の特徴

1. 明るく、楽しく、元気があるFD活動
2. 草の根のごとく浸透するFD活動 (FDネットワークの構築)

* たとえ長い時間がかかっても、授業サロンを通じた「やらされ感」のないFD活動の仲間づくりを粘り強く続けていくこと。

CHUBU UNIVERSITY 今後の展開に向けて

最新の「中教審の答申」に絡んだ今後の課題
生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ
課題山積状態ですが・・・

■ 学生の主体的に考える力を育成するための工夫

→

- ・**教員間で、問題意識を共有する場が必要。**
答申にちなんだ講演会の開催など。
- ・**知恵を出し合う場が必要。**
テーマを設定したFDカフェの実施など。
- ・**教育手法・ツールの開発**
特別研究C Cumoc など。



CHUBU UNIVERSITY

ご清聴ありがとうございました



中部大学 大学教育研究センター
副センター長 寺澤 朝子

代表アドレス : kyokenc@office.chubu.ac.jp
ホームページ : <http://www.chubu.ac.jp/fd/>

今後のFD活動の学部対応について

理工学部 理工学教育推進センター委員会 委員長 吉久光一 教授

1

第14回FDフォーラム 名城大学

今後のFD活動の学部対応について

平成24年10月31日

理工学部 理工学教育推進センター委員会 委員長
名城大学 理工学部 建築学科 教授
吉久光一

1

2

はじめに

理工学部では、平成15年度にJABEE推進委員会、平成19年度に理工学教育推進センター委員会を設置し、FDの取り組みを進めている。

FD (Faculty Development) : 教授団の資質の開発
⇒ファカルティ(教授団)のディベロップメント(開発・育成・向上・強化)

■狭義のFD
「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組」
⇒教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催など

■広義のFD
「大学(学部・学科)の教育力を向上させるための組織的な取組」

2

3

内容概要

1. JABEEの取組

- JABEEについて
- 取組の組織
- 教育改善のためのアンケート

2. 理工学教育推進センター委員会の活動

- GP、教育の質保障プロジェクトの取組
- 初年次教育の施策
- 教育フォーラムの開催
- 学外フォーラムへの参加
- その他

3. 今後のFD活動

3

4

JABEEの取組

■JABEE
日本技術者教育認定機構(JABEE: Japan Accreditation Board for Engineering Education / 設立 1999年11月19日)は技術系学協会と密接に連携しながら技術者教育プログラムの審査・認定を行う非政府団体

■JABEEの目的
JABEEの目的は、定款3条にあるように、「統一的基準に基づいて高等教育機関における技術者教育プログラムの認定を行い、その国際的な同等性を確保するとともに、技術者教育の向上と国際的に通用する技術者の育成を通じて社会と産業の発展に寄与すること」である。

■JABEEの基本思想

- ・学習成果重視 (Outcomes-based) ⇒ いかなる人材を卒業させるか
- ・学習・教育到達目標の公表 ⇒ 卒業生の知識・能力の明示、社会・学生との契約
- ・国際的同等性の確保 ⇒ 保証されている水準はどの程度か
- ・継続的改善
- ・証明はプログラム運営組織の責任 ⇒ 試験問題、解答、レポート、論文、作品等の提示

5

JABEEの取組

■「認定の目的」
本機構が実施する技術者教育プログラムの審査、認定及び公表は、次の(1)~(4)を目的とする。

(1) 技術者教育の質を保证する。すなわち、技術者教育プログラムのうち、本機構が認定したものを公表することによって、そのプログラムの修了生(以下「修了生」という。)がそこで定めた学習・教育到達目標の達成者であることを社会に知らせる。

(2) 優れた教育方法の導入を促進し、技術者教育を継続的に発展させる。

(3) 技術者教育の評価方法を発展させるとともに、技術者教育評価に関する専門家を育成する。

(4) 教育活動に対する組織の責任と教員個人の役割を明確にするとともに、教員の教育に対する貢献の評価を推進する。

5

6

JABEEの取組

■「認定基準」
「認定基準は下記のようにPlan, Do, Check, Actの順となっている。分野別要件は、主に基準1を補足して、その分野で最小限身につけるべき専門的内容を要求している。」

基準1: 学習・教育目標	Plan	⇒ 基準1
基準2: 学習・教育の量	Do	⇒ 基準2
基準3: 教育手段(入学者選抜方法、教育方法、教育組織)	Do	
基準4: 教育環境(施設・設備、財源、学生への支援体制)	Do	
基準5: 学習・教育目標の達成	Check	⇒ 基準3
基準6: 教育改善(教育点検システム、継続的改善)	Act	⇒ 基準4

2012年度認定基準

6

7

JABEEの取組

各プログラムでは少なくとも(a)-(i)に対して具体的に適切な学習・教育目標を設定し、学生のみならず社会に公開しなければならない。

共通基準〔基準1〕
学習・教育到達目標にて具体化を求める項目

(a) 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養
 (b) 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び技術者が社会に対して負っている責任に関する理解
 (c) 数学及び自然科学に関する知識とそれらを用いる能力
 (d) 当該分野において必要とされる専門的知識とそれらを用いる能力
 (e) 種々の科学、技術及び情報を活用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
 (f) 論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力
 (g) 自主的、継続的に学習する能力
 (h) 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力
 (i) チームで仕事をするための能力

←2012年度認定基準で追加

7

8

JABEEの取組

図-1 JABEE認定プログラム数と修了生数

■2011年度までに、171教育機関、450の学士課程プログラムが認定。
 修了者の累計は約17万人。
 JABEE認定の対象となり得る学科の卒業生のうち約25%を占める。

8

9

JABEEの取組

図-2 分野別のJABEE認定プログラム数(～2011年度)

化学および化学関連分野	工学(総合複合・新領域)関連分野
材料および材料関連分野	建築学および建築学関連分野
材料および材料関連分野	物理・応用物理学関連分野
地球・資源およびその関連分野	建築工学関連分野
情報および情報関連分野	農学一般関連分野
電気・電子・情報通信およびその関連分野	森林および森林関連分野
土木および土木関連分野	機械工学およびその関連分野
農業工学関連分野	生物工学および生物工学関連分野

9

10

JABEEの取組(理工学部)

■名城大学理工学部の動き

2002年度(H14年度)	理工学部教務委員会内にWGを設置
2003年度(H15年度)	理工学部JABEE特別(推進)委員会が発足
2004年度(H16年度)	電気電子工学科、機械システム工学科、交通機械工学が認定
2005年度(H17年度)	建設システム工学科が2年認定
2006年度(H18年度)	建築学科が認定
2008年度(H20年度)	材料機能工学科が認定
2009年度(H21年度)	環境創造学科が認定
2010年度(H22年度)	情報工学科が認定

JABEE推進委員会
 >委員長：学部長の指名による教授
 >委員：学科委員(9名)、教養教育委員(語学、人文・社会、化学、物理の4名)、
 大学教育開発センター職員

10

11

JABEEの取組(建築学科)

- 教育プログラム(学科)内の組織活動
 - > 学科教育支援委員会
 - > JABEE推進幹事会
 - > 系別ネットワーク会議
 - > 外部評価委員会
- 各種アンケートの実施
 - > 学習到達目標の達成度アンケート
 - > 卒業時のアンケート
 - > 卒業生アンケート
 - > 企業アンケート

11

12

学科のJABEEの取組

建築学科のJABEEに関わる総合的な教育点検・改善システム

12

13

JABEEの取組 (建築学科)

名城大学理工学部建築学科

学科教育支援委員会規約

名城大学理工学部建築学科に学科教育支援委員会を置く、学科教育支援委員会の活動については以下のように定める。

1. 目的：本学科における JABEE に関わる総合的な教育点検・改善システム全般の課題について検討し、その結果を教員会議等に諮る。
2. 委員長：建築学科教授より選出する。
3. 組織：建築学科教員をもって構成する。
4. 成立・可決要件：
 - 4-1. 委員会の成立要件は、構成員の過半数の出席による
 - 4-2. 案件の可決要件は、出席者の過半数の賛成による
 - 4-3. 学科教育支援委員会での決定事項は、教員会議に諮り、審議を受ける
 ただし、学科教育支援委員会の出席者数が教員会議の成立要件を満たしている場合、可決した事項は教員会議での可決事項とみなし、教員会議の審議を要しない。

14

JABEEの取組 (建築学科)

名城大学理工学部建築学科

JABEE 推進幹事会規約

名城大学理工学部建築学科に JABEE 推進幹事会を置く、JABEE 推進幹事会の活動については以下のように定める。

1. 目的：本学科における学習・教育目標を達成するために教育支援プログラムを総合的に点検するとともに、そのプログラムを構成する各制度の改善策を提案し、その結果を必要に応じて学科教育支援委員会等に諮る。
2. 委員長：建築学科教員の互選によって定める。
3. 組織：建築学科教職員の代表者をもって構成する。
4. 開催：建築学科教職員、学科教育支援委員会または系別ネットワーク会議から要請があった時に随時開催する。
5. 協議事項：以下の事項を協議する。
 - ・教育改善プログラムの点検と改善策に関する検討

14

15

JABEEの取組 (建築学科)

名城大学理工学部建築学科

系別ネットワーク会議規約

名城大学理工学部建築学科に系別ネットワークを置く、系別ネットワークの活動については以下のように定める。

1. 目的：本学科における学習・教育目標を達成するために教育支援プログラムを専門分野別に点検するとともに、カリキュラムの改善と効果的な実践・方法について検討し、その結果を必要に応じて JABEE 推進幹事会等に諮る。
2. 組織：建築学科の **計画系**、**歴史・文化系**、**構造系**、**材料・生産系**、**環境系**の各系の教員をもって構成する。
3. 開催：建築学科教職員、学科教育支援委員会または JABEE 推進幹事会から要請があった時に随時開催する。
4. 協議内容は以下の事項を協議する。
 - ・カリキュラムの改正と実施方法の検討

15

16

JABEEの取組 (建築学科)

名城大学理工学部建築学科

外部評価委員会規約

名城大学理工学部建築学科に外部評価委員会を置く、外部評価委員会の活動については以下のように定める。

1. 目的：本学科における JABEE に関わる総合的な教育点検・改善システムを社会の立場から見て評価および検討し、その結果を学科教育支援委員会等に諮る。
2. 委員長：委員の互選によって定める。
3. 組織：学識経験者 2名以上
建築学科非常勤講師 2名以上
卒業生勤務先関係者 5名以上
4. 任期：3年とし、再任を妨げない。
5. 開催：原則年1回開催するほか、建築学科教職員、学科教育支援委員会から要請があった時に随時開催する。

17

JABEEの取組 (建築学科)

1. 教育プログラム(学科)内の組織の活動
 - 学科教育支援委員会
 - 系別ネットワーク会議
 - JABEE推進幹事会
 - 外部評価委員会
2. 各種アンケートの実施
 - 学習到達目標の達成度アンケート
 - 卒業時のアンケート
 - 卒業生アンケート
 - 企業アンケート

17

18

JABEEの取組 (建築学科)

1-(2)-3 「学習到達目標の達成度と授業評価に関する調査」実施要項 (その1)

平成 23 年 5 月 12 日

アンケート実施要項

名城大学理工学部建築学科
学科長 武藤 厚

■実施の科目数：各先生方、前期1科目（複数科目担当している場合には、1科目指定して下さい。）

■実施期間：6月10日～6月22日（10回日頃）

■作成枚数：講義の後半（10回日頃）用の1種類

■実施方法：配布するアンケートとマークシートは学科事務室でお渡しいたします。アンケート実施後、回収したマークシート等は学科事務室にお渡し下さい。

■設問内容：作成にあたっては下記の点に留意下さい。

- 「自己学習時間数」については、JABEE 申請の際の自己点検書に記載する必要がないため変更しないで下さい。
- 到達目標：実施回までのシラバスに記載した到達目標を10個程度設定してください。（数回をまとめて目標を設定している場合には、シラバスに合わせてください。）

※ 自己評価（授業評価）については別途実施要項を参照してください。

JABEEの取組 (建築学科)

平成 23 年度 —— 建築学科 ——

《 学習到達目標の達成度と授業評価に関する調査 》

科目名称 建築環境計画 担当教員 青久 浩一 曜日・時間 火・1,2時間

【達成度の自己評価】 この科目の到達目標について現時点の達成度を a~e で評価して下さい
(回答: a: 十分に達成できた; b: 大体達成できた; c: 達成が不十分)

到達目標	1. 建築分野における環境計画の位置づけとその役割を理解できる。
	2. 管理環境計画の基礎として、物理量や数値の役割とその重要性を理解できる。
	3. 1次元の波動方程式が理解できる。
	4. 設置材料の種類と機構を理解し、それぞれの設置特性の特徴を挙げられる。
	5. 遮音の質量則やコインシデンス効果を知り、遮音材料の種類と機構を理解できる。
	6. 3つの設置式の違いを理解し、重の減衰時間の計算が適切にできる。

【授業評価アンケート】 この授業に関する以下の設問に a~e で評価して下さい

自	7. あなたは、授業にきちんと出席していますか。 a: 毎回出席し無遅刻 b: 毎回出席だが何回か遅刻 c: 1-2回欠席 d: 3-4回欠席 e: 5回以上欠席
	8. あなたは、授業のノートを書きこんでいますか。 a: 書くそう思う b: やや書くそう思う c: どちらとも思わない d: あまり書くそう思わない e: そう思わない
已	9. あなたは、授業のとき教壇のどの位置に座っていますか。 a: 前から1/3くらい b: 前から1/3-2/3くらい c: 後ろから1/3くらい
	10. あなたは、授業の内容に興味を持っていますか。

JABEEの取組 (建築学科)

大学の教育環境に対する評価アンケート 2011年2月14日

このアンケート調査は、本学科の教育環境や教育改善のための基礎資料を作成するために実施するものです。個人のデータあるいはご意見を直接、外部に公表することはありませんので、以下の設問に対して忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

【回答の方法】
・ 問1-問17についてマークシートにご記入下さい。新科目(「専修研究」)、実習日、学籍番号、氏名を所定の欄に記入し、黒の鉛筆(ボールペンに不可)で該当する欄を塗って下さい。

大学における教育環境などに関する質問

【問 1】卒業研究・制作および発表会での経験は、卒業後の進路先(就職、進学)で役に立つかと思いますか。
a. 大いに役立つ b. ある程度役立つ c. どちらとも言えない
d. あまり役に立たない e. 全く役に立たない

【問 2】あなたの卒業後の進路(就職、進学)活動を行っている際、教員や大学からの支援(例えば、就職関係資料、就職・企業セミナー、エントリーシート作成時のコンピューターの利用環境)は役に立ちましたか。

20

JABEEの取組 (建築学科)

名城大学理工学部建築学科 卒業生へのアンケート

このアンケート調査は、本学科の教育環境や教育改善のための基礎資料を作成するために実施するものです。個人のデータあるいはご意見を直接、外部に公表することはありませんので、以下の設問に対して忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

【回答の方法】
・各設問に対する回答は、アンケート用紙に直接ご記入下さい。選択のある設問には、該当する番号に○をつけて下さい。「その他」の場合は、その内容を具体的に括弧内にご記入下さい。
・自由に記入する場合には、回答欄に要点をご記入下さい(箇条書きで結構です)。
・回答頂きましたアンケートは、同封の返信用封筒により **平成22年1月15日(金)**までにご返送下さい。

【問合せ先】
名城大学理工学部建築学科 学科教育支援委員会
TEL: 052-832-1151(代表) 担当: 鈴木(内線:5226)、高井(内線:5210)、建築学科事務室(内線:5210)
E-mail: htakai@comf.s.ewi.jo-u.ac.jp (高井)

大学で学んだ知識に関する質問

学部名: 昭和・平成 ____ 年度 卒業 (大学院修了: 昭和・平成 ____ 年度 修了)

21

JABEEの取組 (建築学科)

名城大学理工学部建築学科の卒業生および教育に対するアンケート

このアンケート調査は、本学科の教育環境や教育改善のための基礎資料を作成するために実施するものです。貴社あるいはご意見を直接、外部に公表することはありませんので、以下の設問に対して忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

【回答の方法】
・各設問に対する回答は、アンケート用紙に直接ご記入下さい。選択のある設問には、該当する欄あるいは番号に○をつけて下さい。「その他」の場合は、その内容を具体的に括弧内にご記入下さい。
・自由に記入する場合には、回答欄に要点をご記入下さい(箇条書きで結構です)。

貴社が求める人材と本学卒業生の印象について

企業名: _____ 部門/部署: _____

【問1】社内で求められている人材として以下のようなものが考えられますが、各人物像に対して、貴社ではどの程度求めていますか。該当する欄に○を付けて下さい。

人材像	かなり求めている	ある程度求めている	求めていない
-----	----------	-----------	--------

22

JABEEの取組

学部における教育貢献表彰制度(H16年度～)

平成16年10月21日(木)
社大学科長会議
理工学部教員会

教員の教育貢献表彰に関する申し合わせ

- 各教員の教育貢献の評価の実施結果に基づき、教育に関する貢献度の極めて高い教員に対して「教育貢献表彰」を行なう。
- 「教育貢献表彰」の対象者の選考は、各学科(教養教育を含む)からの推薦に基づき、「教育貢献表彰者選考委員会」が行ない、教授会がこれを承認する。
- 「教育貢献表彰者選考委員会」の構成は学部長の指名による。

この申し合わせは平成16年4月1日から施行する。

23

内容概要

- JABEEの取り組み
 - JABEEについて
 - 取組の組織
 - 教育改善のためのアンケート
- 理工学教育推進センター委員会の活動
 - GP、教育の質保障プロジェクトの取り組み
 - 初年次教育の施策
 - 教育フォーラムの開催
 - 学外フォーラムへの参加
 - その他
- 今後の活動

24

平成19年度 理工学教育推進センター（1年目）

- ▶理工学部の教育改善を推進することを目的として平成19年6月に設立
- ▶前身は教育改善委員会と教育GPワーキンググループ
- ▶教育改善に係る取り組みを全学組織である大学教育開発センターと連携して実施

■平成19年度 GP申請（平成19年5月）
 テーマ：「実・感」教育によるものづくり人材の育成（人を感じ、ものを感じ、そして実行できる力を養う総合的な取組）

■センターの構成員

- ▶センター長：安藤義則
- ▶副センター長：村本祐二、松本幸正
- ▶委員：学科委員、教養教育委員、教務委員長、総合数理教育センター長、大学教育開発センター職員、理工学部職員
 （現在：大学教育開発センター委員会委員、理工学部JABEE推進委員長）

平成19年度 理工学教育推進センター（1年目）

- 数学教育の改善（自己診断テスト、再試験、再履修、基礎演習、相談室）の取組の立案
 - ▶数学基礎知識習熟度自己診断テスト
 - ▶数学相談室設置の具体案
 - ▶数学基礎演習の開講時限等
 - ▶数学の習熟度別クラス（基礎演習履修の勧め）
- リフレッシュセミナー、少人数教育、各種フォーラム
 - ▶リフレッシュセミナー（理工学部の教育的取組）の検討
 - ▶少人数教育についての検討
 - ▶平成19年度「特色ある大学教育支援プログラム」フォーラム大阪会場参加
 - ▶平成20年度 教育・学習の改善・創成プログラム経費申請説明会参加
 - ▶その他各種フォーラムの参加
- 理工学教育推進フォーラムの計画、実施

26

第1回 理工学教育推進フォーラム

- ▶テーマ：専門の基盤となる理数教育を考える
- ▶日時：2008年3月10日(月) 13:00～17:40
- ▶場所：名城大学天白キャンパス 共通講義棟北 N201 教室

▶開会挨拶 理工学部長 江上 登

▶理工学教育推進センターの紹介 理工学教育推進センター長：安藤義則

▶数学教育改革取組計画の紹介 理工学教育推進センター委員：小澤達也

▶特別講演：

理工学基礎教育改革の紹介 早稲田大学名誉教授：近桂一郎氏

数学教育改善の実践例の紹介 大阪府立大学総合教育研究機構 教授：高橋哲也氏

▶パネルディスカッション

コーディネータ 名城大学教授 板橋一雄

コメンテータ 大学教育開発センター長 池田輝政

パネラー 理工学部各学科代表者、教養教育代表者

▶まとめ 理工学部長 江上 登

27

平成20年度 理工学教育推進センター（2年目）

平成20年度GP申請（平成20年5月）
 「科学基礎力を備えた工学技術者の育成（技術づくりへの目覚めと理数ロードマップによる専門科目と理数科目との連携強化）」

■1年次の数学教育改革

- ▶自己診断テストの実施
- ▶数学基礎演習の履修勧告
- ▶数学相談室の設置・運営
- ▶次期の再履修

■学外フォーラム・シンポジウムへの参加

- ▶委員が参加し、他大学の動向や教育改善に関する最新の情報を収集
- ▶委員会で委員が参加報告し、情報の共有化を図る（教職員の意識改革）

28

平成21年度 理工学教育推進センター（3年目）

平成21年度GP申請
 テーマ：「学生自身による目標指向型学習体系の確立（理工学ナビゲーションシステムを利用した個別学習PDCAサイクルの実現）」⇒「教育・学習の改善・創成プログラム」

■数学教育改革による施策の2年目の実施

■その他

- ▶物理学の教育改善：物理学基礎演習アドバンスコースの開講
- ▶学科配属後セミナー（リフレッシュセミナー）の取りまとめ
- ▶理工学教育推進フォーラムの計画、実施
- ▶学外フォーラム・シンポジウムへの参加
- ▶日本工教育協会年次大会における発表（松本前年度副委員長：当センターの取組）

29

理工学ナビゲーションシステムの紹介記事

2009年(平成21年)11月17日 火曜日

学生個々の学習支援システム

名城大MSの顧客管理応用

第2回 理工学教育推進フォーラム(1)	
テーマ:「理工学基礎教育の課題と情報技術活用の可能性」	
日時:平成22年3月24日(水)13:00~17:20 会場:名城大学天白キャンパス 理工学部 第一会議室(11号館105室)	
■プログラム 開会挨拶 理工学部長 安藤義則 理工学教育推進センターの活動経緯 理工学教育推進センター長 吉久光一	
第1部 理工学教育の現状と課題(13:15~15:00)	
(1) 数学教育の現状と課題	数学科 古家 守
(2) 物理学教育の現状と課題	教養教育 中山章宏
(3) 専門教育から見た理工学基礎教育	環境創造学科 杉山秋博
(4) 大学における科学基礎教育改革の視点	総合数理教育センター長 川勝 博
(5) 参加者とのディスカッション I	
【休憩】15:00~15:10	
	31

第2回 理工学教育推進フォーラム(2)	
テーマ:「理工学基礎教育の課題と情報技術活用の可能性」	
日時:平成22年3月24日(水)13:00~17:20 会場:名城大学天白キャンパス 理工学部 第一会議室(11号館105室)	
■プログラム 第2部 理工学教育における情報技術活用の可能性(15:10~17:20)	
(1) 名城大学における情報センターの役割	情報センター長 高橋友一
(2) 理工学教育における情報技術活用導入の背景	情報工学科 佐川雄二
(3) 理工学ナビゲーションシステムの開発 (有)ページワン 取締役部長 木村せつ子氏	
(4) 理工学ナビゲーションシステムに期待される効果	情報工学科 佐川雄二
(5) 建設システム工学科 学習状況・授業評価WEBシステムの開発	建設システム工学科 新井宗之
(6) 参加者とのディスカッション II	
まとめ	理工学部長 安藤義則
	32

平成22年度 理工学教育推進センター (4年目)	
■「平成22年度 教育の質保証を目的とする学内取組」への申請 初年度理数基礎教育の充実と理工学ナビゲーションシステムによる理工学教育の質保証	
■数学教育改革による施策の3年目の実施	
■理工学ナビゲーションシステムの2年目の構築	
> 東海工教育協会地区大会の開催(10月28日) > 物理学の教育改善:物理学相談室の開講 > 学科配属後セミナー(リフレッシュセミナー)の取りまとめ > 「初年次教育でなぜ学生が成長するのか」の配布 > 学外フォーラム・シンポジウム等への参加 > 日本工教育協会年次大会における発表(鈴木温委員:当センターの取組)	
	33

平成23年度 理工学教育推進センター (5年目)	
■「平成23年度 教育の質保証を目的とする学内取組」 「初年度理数基礎教育の充実と理工学ナビゲーションシステムによる理工学教育の質保証」	
■数学教育改革による施策の4年目の実施	
■理工学ナビゲーションシステムの3年目の構築	
> 物理相談室の運営 > 学科配属後セミナー(リフレッシュセミナー)の取りまとめ > 学外フォーラム・シンポジウムの参加 > 理工学教育推進センターのホームページ運用 > 理工学教育推進フォーラムの計画、実施 > 新カリキュラム(H25.4スタート)における初年次教育の充実	
	34

第3回 理工学教育推進フォーラム	
テーマ:「初年度理数基礎教育の充実と理工学ナビゲーションシステムの構築」	
日時:平成23年11月10日(木)15:30~18:00 会場:名城大学天白キャンパス 理工学部 第一会議室(11号館105室)	
第1部 開会挨拶 理工学部長 安藤義則 理工学教育推進センターの活動経緯 理工学教育推進センター長 吉久光一 名城大学における教育改善支援の取組 一大学教育開発センターの支援策一 大学教育開発センター長 宮嶋秀光	
第2部 (1) 教育の質保証プロジェクト(22年度報告と23年度計画) 情報工学科 佐川雄二 (2) 理工学ナビゲーションシステムの開発状況 (有)ページワン 代表取締役 木村 謙 (3) 理工学ナビゲーションシステムの導入計画 情報工学科 佐川雄二 (4) 建設システム工学科 学習状況・授業評価アンケート等WEBシステム(PASTEL)の運用状況 建設システム工学科 新井宗之 ディスカッション・まとめ	
	35

平成24年度 理工学教育推進センター (6年目)	
■「平成24年度 教育の質保証プロジェクト」 > 「セルフチェックと学習アドバイザー制度を用いた学生自身による質保証」 > 「WEBを用いた理工学教育・学生指導等支援システムの構築」	
■数学教育改革による施策の5年目の実施(見直し・改善)	
■理工学ナビゲーションシステムの4年目の構築	
> 学科配属後セミナー(リフレッシュセミナー)の取りまとめ > 物理相談室の3年目の実施 > 学外フォーラム・シンポジウムの参加 > 理工学教育推進センターのホームページ運用 > 理工学教育推進フォーラムの計画、実施 > 新カリキュラム(H25.4スタート)における初年次教育の充実	
	36

今後のFD活動の取組（1）	
<p>■理工学教育推進センター委員会（JABEE推進委員会と連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 理工学ナビゲーションシステム、学生指導等支援システムの構築 ➢ 数学教育改革（数学相談室の開催、数学基礎知識習熟度自己診断テストの実施） ➢ 物理相談室の開催 ➢ 教養と専門教育教員との懇談会の開催 ➢ 理工学教育推進フォーラムの開催 ➢ 学外フォーラム・シンポジウムへの出席 ➢ 理工学部教育貢献表彰の実施 <p>■今後の取組の立案</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組みの検討 ➢ 基礎ゼミの活用、大学院での授業評価アンケートの実施、PDCAサイクルの実現、E-ラーニングの実現、学生の参加など ➢ 教育の質保証プロジェクトへの応募 ➢ FD委員会との連携 	
	37

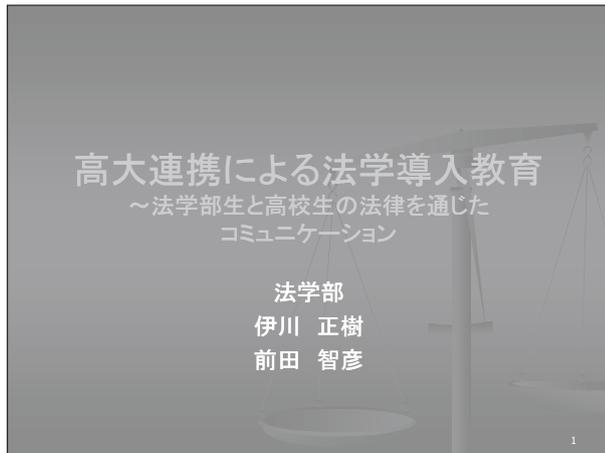
今後のFD活動の取組（2）	
<p>■JABEE関連事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育プログラム(学科)内の組織の活動 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 学科教育支援委員会 ➢ 系別ネットワーク会議 ➢ JABEE推進幹事会 ➢ 外部評価委員会 2. 各種アンケートの実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 学習到達目標の達成度アンケート ➢ 卒業時のアンケート ➢ 卒業生アンケート ➢ 企業アンケート 	
<p>■議事記録の作成、保管体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 委員会の議事録作成 : 委員会委員が作成し、委員会のHPIに掲載 ➢ 委員会資料の保管 : PDFファイルにしてHPIにアップ 	

高大連携による法学導入教育～法学部生と高校生の法律を通じたコミュニケーション

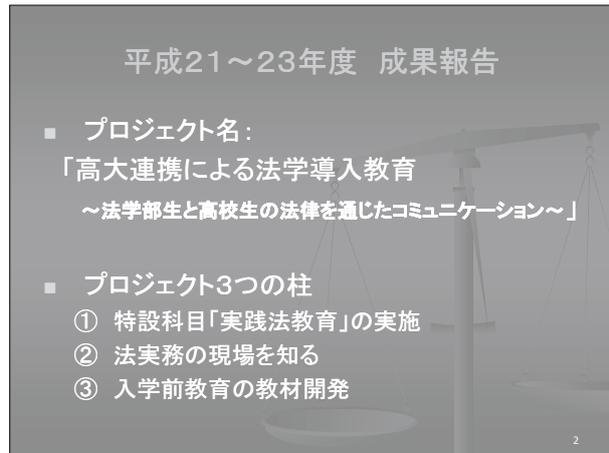
法学部 伊川正樹 准教授

前田智彦 准教授

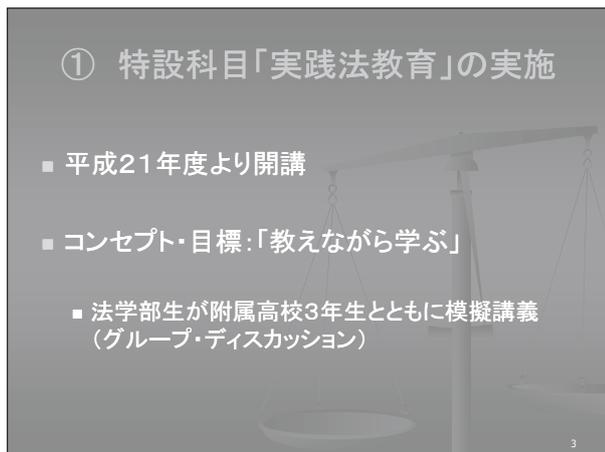
1



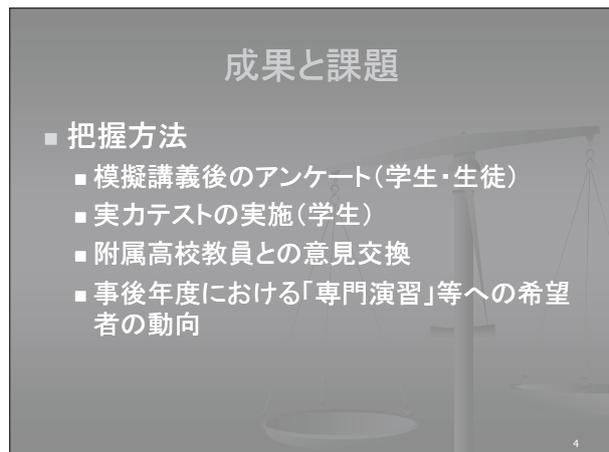
2



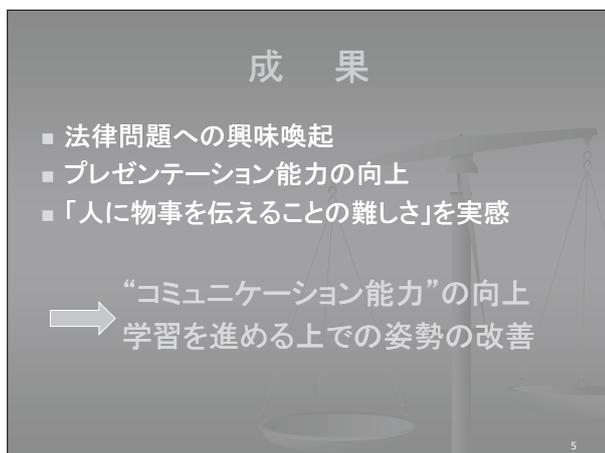
3



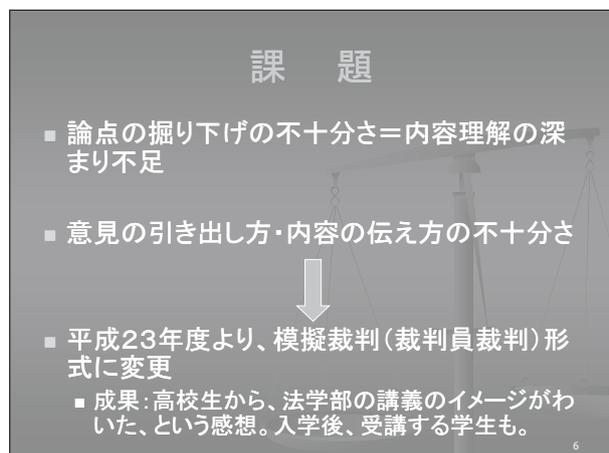
4



5



6



7

② 法実務の現場を知る

- 実務家講演会の実施実績
 - 平成21年度
 - 第1回(10月30日) 正木 健司 弁護士
 - 第2回(12月24日) 岩瀬 秀幸 社会保険労務士
 - 平成22年度
 - 第1回(10月29日) 大崎 宏則 司法書士
 - 平成23年度
 - 第1回(6月10日) 白井 玲子 検事
 - 第2回(11月25日) 村瀬 寛裕 判事
- 裁判所見学の実施(夏季休暇中・継続中)
- 成果:現場の生の声を聞くことにより、法曹実務をリアルに感じることができた(学生提出の感想文より)

8

③ 入学前教育システムの開発

- ウェブ上でクイズ形式の問題に取り組む教材
 - おさらい編(高校で学習した、日本史・世界史・現代社会の問題)
 - 法学入門編(興味・進路に合わせて各自が選択して解く法律問題)
- 対象:推薦入試に合格し、一次手続を行った者

9

入学前教育システムの成果

- 推薦入試に合格した入学予定者に対し、法学部での学習に必要な基礎知識を提示
- 高校での学習内容の確認・定着
- 法学部での学習内容を提示
- 大学入学までの時間を有効活用
- MECIに代わりうる入学前教材として活用

10

入学前教育システムの課題

- 問題を解くだけでなく、その後に参考文献を読むなど、次の学習の促進
- 問題の難易度の確認・調整

11

今後の展開・方向性

- 法学部における教育的課題
 - マスプロ教育の補完
 - 導入教育・初年次教育の充実
 - 入学前教育から法学導入教育への接合
 - 従来の教育ノウハウの共有化・集約化
- 平成24年度～「教育改善事例の集約による法学導入教育向け教材の開発」を実施

12

初年次演習で利用可能な教材の開発

- 初年次演習科目
 - リーガル・リサーチ・基礎演習・実践法教育等
各教員の取組み実績・ノウハウの蓄積
- 法学教育に必要な基礎知識＝読む・書く・話す(＝日本語能力)を養成するための素材集
- 初年次演習科目での共有

↓ 反映 ↓

↓ フォード ↓

13

本プロジェクトのメリット

- 実践法教育の問題
 - 受講生の限定性(時間割編成上の問題)
- 入学前教育システムの課題
 - 対象者の限定性(推薦入試合格者のみ)

↓

- 対象者の拡大
- 入学前教育から法学導入教育への接合

13

14

本プロジェクトのねらい

- 従来の『法学入門』等の教材
 - 1年生向けの「法学」(マスプロ講義)での利用や学習者の自習を想定

↑ ↓

- 「素材集」としての新規教材
 - 少人数教育＝演習での利用を想定
 - 担当教員の指導方針に合わせて使用する素材の選択が可能…汎用性

14

フィールドワーク教育による汎用的技能修得

経済学部 山本雄吾 教授

1

平成24年10月31日
第14回FDフォーラム

フィールドワーク教育による汎用的技能修得

経済学部 山本雄吾

2

1. 経済学部のフィールドワーク科目(1)

- フィールドワーク=教室での講義ではなく、企業や行政、地域社会に出かけて行き、視察、ヒアリング、実習等を行うことで、実社会において自ら考え行動できる実践的能力を身につける



3

1. 経済学部のフィールドワーク科目(2)

- 平成24年度開講科目(社会フィールドワーク)

担当教員	タイトル
渋井 康弘	『社史に見る太平洋戦争』と『戦争童話集』から探る普通の人々の戦争体験
杉本 大三	東海地方の水関連プロジェクトと人々の暮らし
伊藤 健司	江戸時代から現代に至る名古屋の産業を理解する
山本 雄吾	産業観光による地域活性化
谷村 光浩	森林/CSR(企業の社会的責任)から考える「持続可能な循環型社会」
井内 尚樹 西山 賢一	自然エネルギー生産に取り組む企業、NPO、自治体について—原子力発電に頼らない地域経済の構築を目指して—

4

1. 経済学部のフィールドワーク科目(3)

- 平成24年度開講科目(国際フィールドワーク)

担当教員	サブタイトル	訪問国	実施時期
李 秀澈	イギリスフィールドワーク	イギリス	8月下旬
井内 尚樹 西山 賢一	ものづくり・自然エネルギー・循環型地域経済システム	フランス・ドイツ	9月初旬

5

2. FDとフィールドワーク科目

①フィールドワーク科目自体が、大教室での通常の講義と比較して、「授業内容の改善」「教える技術や方法の向上」に資するもの。

②さらに平成24年度より、フィールドワーク・マニュアル*の作成に取り組む(平成24・25年度学内GP)。

*既存フィールドワーク科目の内容、授業の進め方、課題等を、シラバスや担当者ヒアリングから抽出。これにより、情報の共有を図り、授業内容の改善のための優れた事例を取り入れることができる。また、新たに担当する際の指針となる。

6

3. フィールドワークの事例(1)

- 平成23年度小牧市コミュニティバス調査(山本担当)
- テーマ:小牧市コミュニティバスの利便性改善、利用促進、コスト削減施策の提言
- 参考「こまき巡回バス調査報告書」

目次
1. はじめに
2. 小牧市の概要
3. こまき巡回バスの概要
4. アンケート調査結果
5. こまき巡回バスの課題と今後の改善方向

付属資料

7

3. フィールドワークの事例(2)

● 実施内容

- ①事前デスクトップ調査:コミュニティバスとは、小牧市の概要等
- ②市役所担当部局ヒアリング
- ③バス停での利用者アンケート
- ④報告書執筆

8

写真1 市役所担当部局ヒアリング



9

写真2 バス停での利用者アンケート



10

4. フィールドワークによる 汎用的技能(学士力)修得

- ① コミュニケーション能力:行政担当者へのヒアリング、バス利用者へのアンケート
- ② 数量的スキル:アンケート結果の統計処理
- ③ 情報リテラシー:webによる情報収集、アンケート結果のグラフ化、パワーポイントによるプレゼンテーション
- ④ 論理的思考力:提言の取り纏め、報告書執筆
- ⑤ 問題解決力:アクシデント対応

知識技能のアウトプットに着目した薬物療法判断能力の育成プログラム

薬学部 大津史子 准教授

1

名城大学薬学部
大津史子

知識技能のアウトプットに着目した
薬物療法判断能力育成プログラム
Pharmaceutical Decision Exercise(e-PDE)

2

問題の所在

- 名城大学薬学部では、問題解決能力の育成を目的としてPBL形式のカリキュラム「薬物治療学」を実施している。

PBL: Problem Based Learning
ケース提示→問題を識別→調査、自主学習
→グループ学習、討論・結論を導く

3

薬学型PBLにICTの導入

問題解決能力

主体的な学び 学び合い

「薬学型PBL支援システム」
WIKI型コアタイムワークシート、クラスレビュー、
プロブレム識別シート、ファーマシューティカル
ケアプラン、ピアレビュー、e-ポートフォリオ、
症例データベース

4

PBL学習後アンケート

薬物治療の考え方の理解に効果的でしたか？

年	効果的であった	やや効果的であった	あまり効果的ではなかった
2009	103	75	6
2010	106	70	8
2011	167	67	10
2012	167	67	10

学習者の満足度は、95%以上と非常に高い。

5

学習成果

ケアプラン評価とモジュールテストの関係

グループワークの成果の学習

PBLを重ね良いグループワークができると知識の習得に繋がること示唆された。

グループのモジュールテスト平均点

第1～第3クールでは、相関なし

6

問題の所在

1年 2年 3年 4年 5年 6年

基礎臨床

薬剤師国家試験

CBT, OSCE

7

医学教育における臨床推論・・・

MicroSim Inhospital

アウトプット訓練
シミュレーション教育

7

8

教育改善の目的・目標

薬物療法判断
能力の育成

薬物療法判断のシミュレーションプログラム
(e-PDE)の開発

知識・技能のアウトプット訓練を実践

8

9

シミュレーションプログラムの特徴

学習者自身が行動し考えなければ
患者の笑顔が見れない！

- ▶ 最初に患者の導入動画が提示され、必要な情報は学習者自ら画面上の患者ヘインタビューし、薬歴や検査データ(アイテム)などを閲覧しなければ入手できない。
- ▶ 入手した情報をこれまでの学びを総動員して評価し、患者の問題点を明確にし、解決プランを立案する。
- ▶ 終了時に間違った判断を選択すると、画面上の患者がびっくりする。つまり、患者の笑顔を見るためには、自ら行動し、適切に考察し、それをアウトプットしなければならない。

9

10

動画素材でシナリオ作成自由自在！

- ▶ 薬剤師の行動パターンに具体的なシチュエーションを設定し、高齢男女、中年男、若い女性のモデルで撮影して動画素材とした(高齢男、中年男、若い女性は9月撮影)。
- ▶ それぞれの動画素材に対し、台詞と対応する薬剤師の質問を設定し、動画素材をインタビューというアイテムの一つとして使用できるようにした。
- ▶ 薬歴、初回問診票、臨床検査結果、処方せんなどのアイテムとインタビューを組み合わせることで、ほぼどのようなシナリオにも対応できるようになった。

10

11

学習者自身の学習履歴の見える化！

- ▶ 学習評価は、シナリオ毎に薬剤師としての行動の重要度や基本的な順序、最終的な判断に評価点数(減点を含む)を設定し自動採点を可能とした。→行動面からの評価
- ▶ さらに、薬剤師として考察すべき内容にキーワードを設定し、評価点数を付与し、提出されたプランから自動採点できるようにした。→知識面からの評価
- ▶ すべての学習は、学習行動履歴(ポートフォリオ)として記録され、その時点で何を考え行動したか、それが妥当であったかを、振り返って繰り返し学習できるようにした。
- ▶ すなわち、これまでの学びを統合し、目の前の患者に対して、知識と技能をアウトプットする訓練が繰り返し可能となった。

11

12

E-PDE 4分

12

13

教育実践による改善効果とその確認

方法 シミュレーションプログラム(e-PDE)の開発

知識・技能のアウトプット訓練の実践

本来のアウトカム 薬物療法判断能力の育成

現在(前期) 高齢女性のみ 10疾患10例

- e-PDEの症例バリエーションと数の蓄積
- 効果的な実施時期の検討

14

教育実践による改善効果とその確認

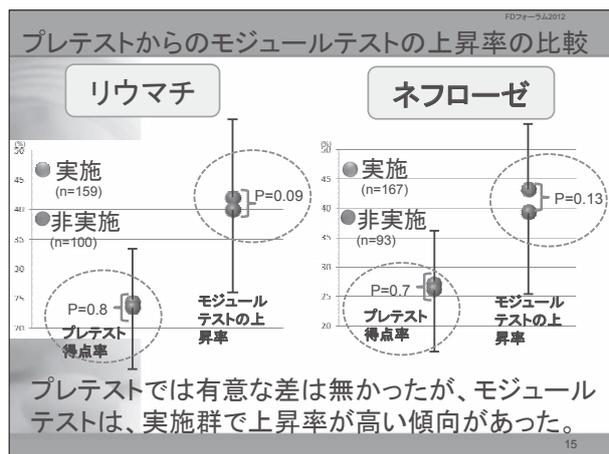
方法

プレテスト → PBL → e-PDE実施 / e-PDE非実施 → モジュールテスト

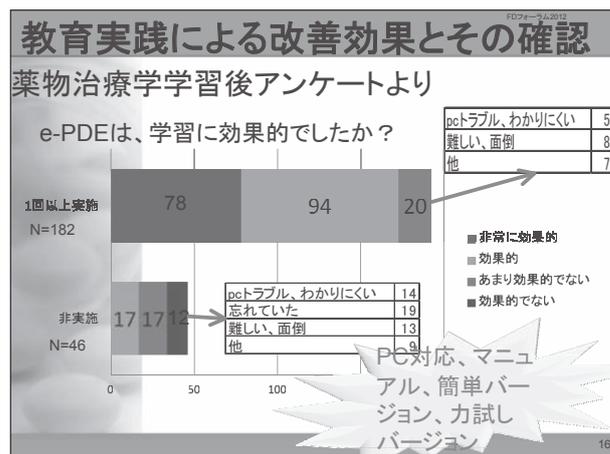
プレテストからモジュールテストの個人上昇率を比較 (分散分析、使用ソフトSPSS.ver.20, IBM)

実施: 任意。自動採点60%以上で加点対象。テスト前1週間に実施。

15



16



17

教育実践による改善効果とその確認

省察及びアンケートより

- 薬剤師自らがアクションを起こして表面に現れていない問題を見つけ解決しなければならないと分かった。
- やっとクリアできた。とても嬉しい。自分では今まで頑張ってきたつもりでも、抜けている知識を発見し、自分の欠点に気づけたような気がする。
- 終わってから、何がいけなかったのか考察するのにもわかりやすく、反省できた。
- とてもよかった。グループでみんなで討論せず、自分ひとりでやってくことの、大変さと責任を改めてわかった。

アウトプット訓練の重要性を認識するとともに、臨床判断の達成感の喜びも感じたことがわかった。

18

まとめ1

- サロゲートなアウトカムではあるが、e-PDEの試みは学習の振り返りとアウトプット訓練に効果的であった。
- 本来のアウトカムを実現するためには、
 - ・症例数、ケースのバリエーションの増加
 - ・実施数を増やしてリバイスし、シナリオの妥当性を向上させる
- ・効果的な実施時期の検討
- ・複数年度に渡って自由に実施できる環境整備

FDフォーラム2012

まとめ2

学習できる症例が一目で見えるようにし、学習履歴がすべて保存されるポートフォリオ機能を可視化した。また、高得点を取得した場合は、ゴールドメダルが表示される。今後この仕組みを利用してモチベーション向上の動機づけにしたい。

リウマチ シナリオ一覧

※ゴールドメダルが10個以上になると、ゴールド証明書が獲得できます。

以下の症例をクリックすると、家庭画面へ移行します。

レベル	カテゴリ	症例名	評価	1年	2年	3年	4年	5年	6年	操作
★★	関節炎	関節炎 関節炎 関節炎	100							100% 学習済
★★	関節炎	関節炎 関節炎 関節炎	100							100% 学習済

※レベル★★以上の症例は、ゴールドメダルが10個以上に達すると、実施可能です。

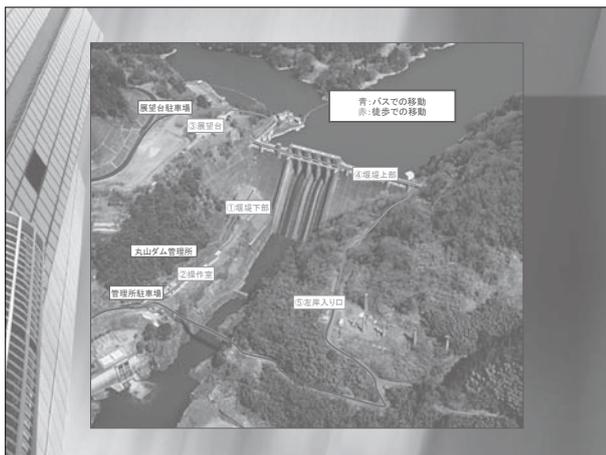
FDフォーラム2012

今後の発展

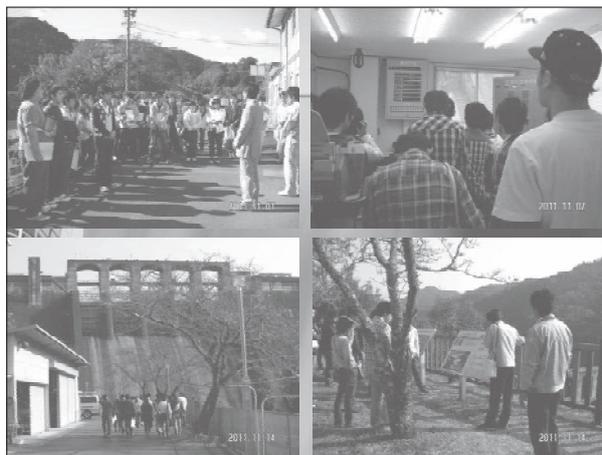
- 今後、小児、中年女性の動画素材を作成することで、臨床的に考慮を必要とするシナリオは、ほぼ作成可能になると考えている。
- また、動画素材の声を変えたり、追加できる機能を持たせることで、より柔軟なシナリオ作りをサポートできると考えている。
- e-PDEに蓄積された学習者の学習行動を解析することで、教育上の問題点を明らかにできる。→FDへ
- e-PDEは、人との対応において、知識技能をアウトプットすべき他の教育分野にも対応できる。

20

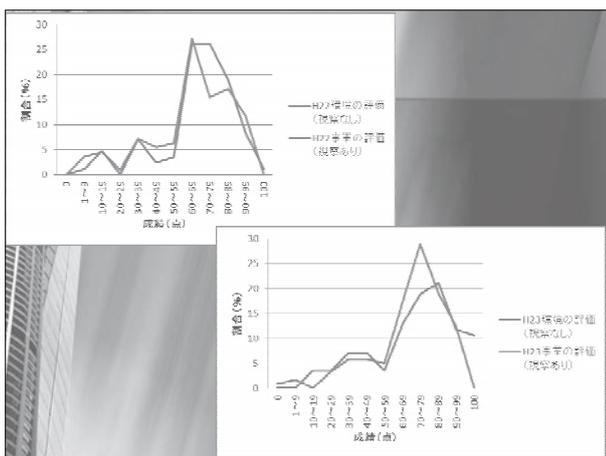
7



8



9



10

取組の成果

- ①シンポジウムの開催
⇒都市情報学部から社会への情報発信
- ②地域連携演習・講座の実施
⇒学生の学習意欲の向上
- ③ドリームマップ授業の実施
⇒学生の就職意識の向上
- ④先進事例の調査
⇒教員の教育内容の充実

11

今後の展開

- ①シンポジウムの開催
⇒継続
- ②地域連携演習・講座の実施
⇒教育現場の中にサービスイノベーションの実務演習を取り込むことにより、学生の実践力強化を図るとともに、改善提案能力を育成するプログラムを開発
- ③ドリームマップ授業の実施
⇒継続
- ④先進事例の調査
⇒継続

12

第14回FDフォーラム 名城大学の教育改善の取組
教育現場と実務現場との融合を
図る現場力強化プロジェクト

ご清聴ありがとうございました

第5回 T&L CAFE～授業を語り合う～ 実施報告

第5回 T&L CAFE ～授業を語り合う～実施報告

名城大学の授業改善に取り組むFD委員会チームの呼びかけによる第5回「T&L CAFE ～授業を語り合う～」が3月1日、タワー75レセプションホールで開かれた。T&L CAFEはTeaching & Learning CAFEの略。コーヒーでも飲みながらリラックスした雰囲気、授業や大学教育について語り合う場として平成20年度から実施されている。若手を含む本学教員13人参加した今回のテーマは「教員と学生の新しい関係について」。「いかに学生のやる気を引き出すかを考えることがFDの観点として必要」「教育を全学で考える仕組みづくりが大切」等の意見が出された。また、授業における私語対応について、参加教員たちが実践例を紹介しながら情報交換する場面も見られた。参加者からのアンケートでは、「学生の声が聞きたい」「授業の工夫が聞けてとても参考になった」などの意見も出され、座長の小池聡・都市情報学部教授は、「今後、このような場を活用し、学生と共に教育改善について考えていく機会が必要ではないか」と総括した。

第5回 T&L CAFE

(Teaching & Learning CAFE)
～授業を語り合う～

平成25年 3月1日(金)
14:00～15:30 (13:45受付開始)

会場: 天白キャンパス タワー75 15階レセプションホール
対象者: 専任教員、非常勤講師及び学生

ティーの時間を活用して、授業の悩みについて教員と学生が気軽に語り合い、お互いの意見を交換・共有し、授業づくりに活かす機会です。みなさまのご参加をお待ちしております。

★お茶、ケーキ等をご用意いたします。
★当日、写真撮影を行います。大学教育開発センターWEBサイト、FDニュースなどで紹介する予定です。

【プログラム】
14:00～14:05 座長からの挨拶
14:05～14:15 自己紹介
14:15～15:30 テーマ: 教員と学生の新しい関係について

学生の積極的な参加を歓迎します!

*参加をご希望の方は、2月15日(金)までに、下記問い合わせ先までご連絡ください。
(人数に限りがありますので、先着順での受付とします。)

主催: FD委員会 自主開発チーム
問い合わせ先: 天白キャンパス本部棟3階
大学教育開発センター
神保、堀口、鈴木
(内線)2659 (直通)052-839-2033
(E-mail)edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp

T&L CAFE (Teaching & Learning CAFE)とは?
授業を行うえでの課題などを、
コーヒー等を飲みながら気軽に語り合い
授業工夫のアイデアを発見する場です。



第5回 T&L CAFE～授業を語り合う～ 参加者アンケート集計結果

○出席者所属

所属	人数	割合
経済	2	15.4%
理工	1	7.7%
農	3	23.1%
薬	1	7.7%
人間	4	30.8%
都市情報	1	7.7%
大学・学校づくり	1	7.7%
合計	13	100.0%

1) 所属について、○をつけてください。

所属	人数	割合
専任教員	9	100%
非常勤講師	0	0%
学生	0	0%
その他	0	0%

2) 本日参加いただいたきっかけについて、○をつけてください。

きっかけ	人数	割合
チラシ	0	0%
HP	1	11.1%
教授会での紹介	3	33.3%
知人の紹介	1	11.1%
その他	4	44.4%

3) 本日まで参加いただきました T&L CAFE はいかがでしたか。当てはまるものに○をつけてください。

評価内容	人数	割合
満足	0	0%
やや満足	4	44.4%
普通	5	55.6%
やや不満	0	0%
不満	0	0%

4) その他、本企画について、次の項目に関して当てはまるものに○をつけてください。

テーマ	人数	割合
満足	0	0%
やや満足	3	28.6%
普通	4	44.4%
やや不満	1	11.1%
不満	0	0%
無回答	1	0%

開催時期	人数	割合
満足	1	11.1%
やや満足	1	11.1%
普通	6	66.7%
やや不満	1	11.1%
不満	0	0%

時間帯	人数	割合
満足	3	33.3%
やや満足	0	0%
普通	6	66.7%
やや不満	0	0%
不満	0	0%

運営方法	人数	割合
満足	1	11.1%
やや満足	2	22.2%
普通	5	55.6%
やや不満	1	11.1%
不満	0	0%

5) 4) について、「4. やや不満」及び「5. 不満」に○をつけた項目に関して、その理由をお聞かせください。

- 年度末より前期と後期の間に開催したほうがよい。
- 全体討論としてはやや人数が多すぎる。
- 学生との関係をテーマにするのであれば、学生の参加は必須なのでは？
- 卒論、入試や決算の時期を避けたほうが教員の参加が増えるかもしれません。

6) T&L CAFE で扱ってほしいテーマについて、ご記入ください。

- 次は卒業研究（ゼミ）について語り合う内容にしていきたい。
- 授業改善アンケートの項目などの再検討のための議論。

7) その他、感想及び要望等ございましたら、ご自由にご記入ください。

- 学生が半分くらいいないと盛り上がりにかける。
- 学生の参加がないのは日時の設定が悪いのでは。
- 学生の声が聞きたかったです。
- 授業の工夫が聞けてとても参考になりました。

FD 委員会在り方検討委員会における検討結果報告

1. FD 委員会在り方検討委員会発足の経緯

本学の FD 活動については、認証評価において、各取組に対して教員が任意の参加に留まっている現状が指摘されている。前 FD 委員会（平成21～22年度）においては、教員が主体的に FD を展開するため、FD 活動の実質化の必要性が提言された。

また、この直後に就任した中根学長からも「教学執行部方針と課題」（H23.4.1付）において、再検討を要する課題として「学部・研究科主体の FD」を推進する指針が示された。

そこで、FD 委員会では、学長の方針を踏まえた FD 活動の在り方を模索してきた。平成24年度第1回委員会（H24.4.19開催）において、FD 委員会在り方検討委員会を設置し、学長指針を踏まえ、かつ、前 FD 委員会が提言した現場（学部・研究科等）における FD 活動の実質化に向けて具体的な検討に着手することになった。

2. 検討委員会の論点

FD 委員会在り方検討委員会における計3回の審議の結果、①各学部・研究科主体の FD 活動及び当該組織の在り方、②FD 委員会の位置づけ、③各学部・研究科等と FD 委員会の関係・連携について、④名城大学の FD の定義、等が主な論点となった。

3. 検討委員会の審議経過

第1回 FD 委員会在り方検討委員会 平成24年6月19日開催
各学部・研究科等主体の FD 取組を推進する体制づくりについて、FD 委員会の承認を経て、全学に提言することとなった。
第2回 FD 委員会在り方検討委員会 平成24年11月20日開催
各学部・研究科主体の FD 取組を推進する組織について、各学部等から回答が集約されたことを受け、本学の FD 委員会の課題について意見が交わされ、引き続き、他大学の事例等を参考として検討を重ねることが了承された。
第3回 FD 委員会在り方検討委員会 平成24年12月7日開催
第2回検討委員会の審議を踏まえ意見が交わされた結果、平成25年度から FD 委員会を再編することを見据え、FD 委員会要項の改正及び本学の FD の在り方について、FD 委員会に提案することが了承された。

FD 委員会在り方検討委員会

委員長 森川 章 FD 委員会委員長
宮嶋 秀光 FD 委員会副委員長
小池 聡 自主開発チーム座長
肥田 進 ワークショップチーム座長
稲垣 公治 学生満足度チーム座長
杉村 忠良 教育年報チーム座長
成塚 重弥 大学院チーム座長

4. 検討委員会における結論

以上審議された結果、以下のようにFD活動の在り方を整理した。

項目	内容
本学のFD活動の定義	他大学等の事例を参考に、本学のFD活動を①授業・教授法の開発【ミクロ・レベル】、②カリキュラム・プログラムの開発【ミドル・レベル】、③組織の教育環境・教育制度の開発【マクロ・レベル】の枠組みで捉え直す。 同時に、本学のFD活動の定義を広く捉え、①から③までを包含することとする。
各学部・研究科等におけるFD活動	各学部・研究科等主体のFD活動に向けて、各学部・研究科等のFD組織が①から③までを包含したFD活動を進めることとする。
FD委員会の位置づけ	各学部・研究科等主体のFD活動の支援を基本的な役割とし、カリキュラムの開発等を含めた各学部等の授業・教育改善を全学的に共有する場とする。 なお、機動的な会議体の運用ができるよう平成25年度から新たなFD委員会が組織できるよう構成員の数を再考することとし、各学部等主体のFD活動が十分に確立された後は、再度、FD委員会の役割を見直す。

【参考：FD活動の分類について】

FD活動を検討するモデルの一例として、国立教育政策研究所では「大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン（平成21年3月）」を作成し、何がFDであるのか、FDの目標、FDの効果的な実施方法、等について枠組みを提示している。

その枠組みにおけるFDプログラムの体系表（FDマップ）によれば、FDプログラムを実施する対象を、①授業・教授法の開発【ミクロ・レベル】、②カリキュラム・プログラムの開発【ミドル・レベル】、③組織の教育環境・教育制度の開発【マクロ・レベル】に分類している。

上記分類における、具体的なFD活動の例（他大学で実践されている一般的な事例）

①授業・教授法の開発【ミクロ・レベル】

・授業アンケート、教員相互の授業参観、授業コンサルテーション等

②カリキュラム・プログラムの開発【ミドル・レベル】

・カリキュラム・ポリシーの制定、カリキュラムの現状診断・評価・開発等

③組織の教育環境・教育制度の開発【マクロ・レベル】

・教育・学生支援に関わる委員会の設置、組織間での連携教育等

*本検討委員会における結論については、FD委員会（H25.1.16開催）において審議され、承認された後、所定の手続きを経て、平成25年4月1日付で関連規定である、FD委員会要項を一部改正することとなった。

教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会における検討結果報告

1. 検討委員会発足の経緯

教育優秀職員表彰制度は、優れた教育効果をあげた教育職員を表彰し、もって教育職員の教育に対する意識を高め、教育の質の向上に資することを目的として、平成17年度から実施され、計17名に賞を授与してきた。平成21年度には推薦の方法について、他薦のみを認めることとした。

平成22年度FD委員会においては、本制度の課題として以下の点が示された。

- ①交互に推薦し合う推薦（推薦者・被推薦者の関係）
- ②複数の候補者の推薦
- ③優れた教育業績に対する選定基準

これらの課題の検討及び制度の在り方を見直すにあたり、平成23年度第1回FD委員会（平成23年7月11日開催）において、「教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会」を設置することが承認され、当該委員会において審議を進めることとなった。

2. 検討委員会の論点

教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会における計3回の審議の結果、①制度目的を教員個人の教育業績の表彰とするのではなく、組織的な教育改善への貢献に対する表彰制度とすること、②受賞者の選定基準、③インセンティブの在り方、等が主な論点となった。

3. 検討委員会の審議経過

第1回 教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会 平成23年9月7日開催
概要及び課題を確認した後、意見交換を経て、よりよい制度に改善する方向で検討を進めることが了承された。
第2回 教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会 平成23年11月7日開催
第1回の方針を受けて、教育活動等の褒章の考え方について整理し、教学における褒章制度に位置付け、取組をたたえる方向に舵取りすることを基本として、引き続き、検討を重ねることが了承された。
第3回 教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会 平成24年1月13日開催
第2回検討委員会です承された方向性に基づき、各学部等における組織的な教育活動等への貢献に対して、教学として褒章する「教育功労賞」として再編することが了承された。
第4回 教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会 平成24年7月24日開催
「教育功労賞」としての制度に基づき、継続審議事項であった選定基準及び副賞の扱い等、詳細部分が決定され、承認された。

教育優秀職員表彰制度在り方検討委員会

委員長 宮嶋 秀光 大学教育開発センター長

杉村 忠良 理工学部

前林 正弘 農学部

田中 敦夫 学務センター

4. 検討委員会における結論

以上審議された結果、教育優秀職員表彰制度は、以下のように制度を修正して存続させることとなった。

	変更前	変更後
名称	教育優秀職員表彰	教育功労賞
目的・位置づけ	教員個人の教育業績の表彰とし、職員規則により理事長から表彰を受ける。	各学部等主体の組織的な教育改善への貢献に対して、学長が表彰する。 受賞者には優れた教育成果を全学に周知させるような機会を持っていただく。
概要	本学職員から、優れた教育効果をあげた教育職員を推薦（他薦）いただき、FD委員会の下、受賞者の選考を行う。	厳格な推薦制度を担保するため、各学部等から、当該学部における教育活動及び教育改善に大きく貢献した者を原則1名（1件）FD委員会に推薦いただき、FD委員会の下に設置した、教育功労者選考委員会で受賞者の選考を行う。 なお、被推薦者の選考は各学部・研究科等の選考に委ねるものとする。 教育功労者の教育活動が全学的に波及する可能性がある取組である場合は、最大1件を特別教育功労者とする。
表彰の方法	副賞10万円。	講演の準備等の対価を勘案し、3万円を進呈。

* 本検討委員会における結論については、FD委員会（H25.1.16開催）において審議され、承認された後、所定の手続きを経て、教育優秀職員表彰制度を廃止し、平成25年4月1日付で新たに教育功労賞制度を発足することとなった。

6. 資 料

F D 委 員 会 要 項

(目的及び設置)

第1条 名城大学学則第24条の2に規定する教育内容等の改善を図るため、FD委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(任務)

第2条 委員会は、次の事項を検討・助言・実施する。

- (1) 本学の教育内容及び教育環境の改善に関すること
- (2) 教育技法の改善・向上のための具体的活動に関すること
- (3) 単位制度の機能化を図るための具体的活動に関すること
- (4) 学生による授業評価の実施・結果公表と授業改善に関すること
- (5) 教員の資質開発を図るための組織的な研修に関すること
- (6) 教育優秀教員の表彰に関すること
- (7) その他委員会が必要とすること

(組織)

第3条 委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 副学長
- (2) 大学教育開発センター長
- (3) 学務センター長
- (4) 各学部から選出された教育職員2名
- (5) 各独立研究科から選出された教育職員1名
- (6) 薬学部及び都市情報学部から選出された事務職員各1名
- (7) 経営本部から選出された事務職員1名
- (8) 学務センターから選出された事務職員3名
- (9) キャリアセンターから選出された事務職員1名
- (10) 入学センターから選出された事務職員1名

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会に、委員長及び副委員長を置く。

- ② 委員長は、副学長を充てる。
- ③ 副委員長は、委員の中から委員長が指名する。

(任期)

第5条 第3条第4号から第10号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

- ② 委員が欠けた場合の補充委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会議)

第6条 委員会は、委員長がこれを招集し、その議長となる。

- ② 委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。
- ③ 委員会は、委員の3分の2以上の出席により成立する。
- ④ 委員会の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数のときは、議長がこれを決する。

(委員以外の出席)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者の出席を求め、意見又は説明を聴くことができる。

(小委員会の設置)

第8条 委員会は、必要に応じて小委員会等を置くことができる。

(事務)

第9条 委員会の事務は、大学教育開発センターで処理する。

附 則

この要項は、平成13年7月21日から施行する。

附 則

この要項は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この要項は、平成18年7月10日から施行し、平成18年6月1日から適用する。

附 則

この要項は、平成21年6月19日から施行し、平成21年4月1日から適用する。

平成24年度 所属別FD活動参加状況

所 属	所属人数 (※1)	H24前期・後期授業改善 アンケート	FD フォーラム	T & L CAFE	教育年報		学外セミナー・ 研究集会等 への派遣
					研究論文投稿 (※2)	実践報告投稿 (※2)	
学長・副学長	3	3	3				
法学部	法学科	22	36	3			
	応用実務法学科	17	30	2			
	計	39	66	5			
経営学部	経営学科	17	32	1			
	国際経営学科	14	26	1			
	計	31	58	2			
経済学部	経済学科	16	24	1			
	産業社会学科	12	18	6	2		
	計	28	42	7	2		
理工学部	理工学部	5	0	2			
	数学科	19	33	0			
	情報工学科	20	30	1	1	1	
	電気電子工学科	20	26	1			1
	材料機能工学科	16	25	1			
	機械システム工学科	17	27	0			
	交通機械工科	17	31	3			
	建設システム工学科	14	22	1			
	環境創造学科	14	18	0			1
	建築学科	17	23	1			
	総合基礎部門	15	22	0			
		計	174	257	10	1	1
農学部	生物資源学科	13	7	1			1
	応用生物化学科	13	25	2	3		
	生物環境科学科	13	24	1			
	総合基礎部門	8	1	0			
	計	47	57	4	3		
薬学部	薬学科	66	56	11	1	2	1
	総合基礎部門	1	1	0			
	分析センター	1	0	0			
	計	68	57	11	1	2	
都市情報学部	都市情報学科	27	49	1	1		
人間学部	人間学科	22	41	14	4		
大学院理工学研究科		2	0	0			
大学院法務研究科		17	0	0			
総合学術研究科		1	0	0			
大学院大学・学校づくり研究科		6	7	1	1		2
教職センター		6	12	0			2
情報センター		2	4	1			
総合研究所		2	1	0			
総合数理教育センター		2	3	1			
大学教育開発センター		6	12	1			
	小計	483	669	61	13		7
職員	監査室	3		0			
	秘書室	5		1			
	経営本部	8		0			
	新学部開設準備室	2		0			
	総合政策部	8		6			
	総務部	15		2			1
	渉外部	9		2			1
	財政部	15		3			
	施設部	15		0			
	入学センター	12		0			
	学務センター	38		5			1
	保健センター	10		0			
	大学教育開発センター	7		6			13
	学術研究支援センター	18		3			
	キャリアセンター	19		2			
	国際交流センター	5		0			
	情報センター	8		0			
	附属図書館	7		1			1
	法学部	6		1			
	経営学部	7		1			
	経済学部	6		2			
	理工学部	20		8			
	農学部	15		0			
	薬学部	11		2			
	都市情報学部	10		1			
	人間学部	5		2			
	附属高校	7		0			
	小計	291		48			17
	計	774	669	109	13	3	24

※1 平成24年4月1日現在。

(教員：助手を含む。終身教授、特任教授(1・2・3号)は含まない。／事務職員：契約職員を含む。派遣職員は含まない。)

※2 延べ人数。代表執筆者のみカウントする。

7. おわりに

編集後記

大学教育開発センター

名城大学のFD委員会委員の任期は2年間となっています。従って、平成23・24年度委員の任期が本年度で終了となりました。

平成24年度においても、平成23年度に引き続き、FD活動の方針は、「学部・研究科主体のFD」です。そのため、全学的なFD活動を推進する名城大学FD委員会は、学部の教育改善を支える委員会へのシフトを志向しています。

平成24年度の特記事項としては、本学のFDの在り方について、「FD委員会在り方検討委員会」で検討を行い、平成25年4月から、新たなFD委員会の枠組みで活動を展開していくことが決定されました。また、各学部における教育活動に大きく貢献した者を表彰するために、「教育優秀職員表彰制度」を「教育功労賞」へと制度を見直しました。

大学教育開発センターは、そのような教員中心のFD活動を支援する、大学教育開発センター長をトップとする職員組織です。平成15年4月に、教育開発を任務とする組織として設置され、それ以降、FDの他、多くの教育改善に係る業務を遂行しています。同時に、本学教育における社会的責任を果たすべく、このような取組の成果を学内外に発信することで、大学教育の強みのアピールに貢献してきました。本センターでは、活動目的を、「大学の各部門における教育改善の支援を通じて、本学の教育の質の向上に貢献する」として位置づけており、平成25年度からリニューアルするFD委員会の主旨と同じく、学部の教育改善を支えるセンターとして日々業務を遂行しています。

次年度以降の名城大学FD活動及び各学部の教育改善を進めるにあたって、本書が一助となることを願っております。

なお、本書は学内外へ発信させていただくと共に、以下、大学教育開発センターホームページ上でも公開しております。FD以外の教育改善の取組成果についても公開しておりますので、皆様の参考となれば幸いです。

名城大学 大学教育開発センター URL：<http://www.meijo-u.ac.jp/edc/>

終わりに、本報告書の企画・編集、各FD活動の企画・運営にご協力いただいた各チームの委員に御礼申し上げます。

平成25年3月

発行：名城大学FD委員会

編集：名城大学 大学教育開発センター

住所：〒468-8502
名古屋市天白区塩釜口1-501

電話：(052)838-2033

FAX：(052)833-5230

